明 治 四 + 年 月 十五 日發行

帝

城

第

三

號

大隅加治木同鄉 會

# 城雜誌第參號目次

0000 (寫版網段)

自治の發展 の装飾に就っ の表情に就っ より見たる農の製飾に就て 桂庵文之との 業、 農業者及 CX 農 台業被宮旗 加 木方川内川

郎近藏三一

長: 平位與盛精 三生一郎郎 五舍二風 本送耕居主名生二現員の殿 ● ○ 商別競繭意 ● 徒 ) 住 ● 厚 ト 提明 話 會 程 整 附 蛤 作 ● 者 學 意 の 資 治 〇〇〇〇 台在維本 0 數

の知

111

關係

在在在在在

5 0) 6

吉り通の衆光

信君

の通信

は通り

の通信

00 竹食

者住所氏名(中込順其二)

寄州老氏名錄(第三回

中込順一

垩

菊本枝

m 廼

親

000

沙錄

言

〇漢

錄

夢

迷

○随想録を讀 U

美縣育業學十精二 員●會舉立督補校年●二會赤記の聯受●加総智報度人●に十事 

節山本包招子表數村家支御 遙下村發魂小●●|電代 置氏出自祭學--現議館総押 親式の身式附校事住員見會使 ●光生及谷駅一戸●島●の ● 人 集徒 以 祀 况 班 口 常 新 閑 御 一 居 加 替 ● 調 創 者 附 二 數 設 開 院 通 二 治 者 馬 ● 立 氏 女 第 ● 委 社 宮 過 六 士

の男賢久津 庭家



庭家の男賢久津島

●明治所子年以前委犯罪事務第四股即代拜使の即通 「職工の問題の後限事界十字計應別見支助総合の開発 「職工の問題の後限事界十字計應別見支助総合の開発 「規事罪必要損益順項金人口本籍戶口總確完性目口数 「生徒作文章女子所書級代表 每轮版五子小品股份の 生並作文章女子所書級代表 每轮版五子小品股份の 生並作文章女子所書級代表 每轮版五子小品股份の 生並作文章女子所書級代表 每轮版五子小品股份の 生並形成的項目會係立加治本中學校不同出並不能 財務部會會後來共進會受賞者為天山施施置或會開始 不能所給の故立章有負の場節 

### 年 新 賀 謹

員 委 輯 編

1

牧竹濱前曾晉三岩美上島

下田田木木見城坂野津

清貞彥豐新悌武豐吉喜久

龙 一 藏 彦 三 二 雄 次 助 助 賢

森 宇 岡 柚 法 濱 長 本 壹 原

都

次

山宮山木元田場田岐田

藤 虎 猪 繁 一 剛 唯 体 定

**次** 二 治 耶 耶 平 二 克 耶 吉

25

棺 城 雜 誌 第

參

號

E 6

新 年 0 辭

天地を一新して。薙々凞々。新年の光景。自から人をして新進の氣象を惹 新暾凍霊を拂ひて。蛇尾嶽頭に輝き。 鮮かなる嶽頭の曙光は。 更に柁城の

起せしむるを覺ふ。

鋭の筆を振び以て一万五千の同郷人士に見へん事を切望するもの也。况ん 舊年を送りて。玆に明治四十一年を迎へたる吾人は。亦硯石を洗浄して。新 とを期一の枕城を一て。威儀堂々として諸賢の膝下に賀侍せ一めんと欲せ せられる吾人獨輯委員。畢生の努力をなって。郷黨の知遇に孤資せざらんこ や「柁城」が新蔵を祝福するは。全然創始の慶事なるに於ては。六尺の孤を托 短春の様の

(-)

て。未だ何等の能力なきを「秘城」を奈何せん

然りと雖ども。搖籃の裡。僅かに清新の象を。感得する 0 呱々乳を求め

日嶄然として頭角を現は一。 さあれ。「枕城」は希望に滿てる孩提兒也。 一世の景仰を享くるや必せり。而して是れ一 幸に健全の發達を為すを得ば

v

吾人と共に。吾が柁城人士の奮勵如 何に係るものなりと知れ。

あゝ。鶯笛未だ東風の じ無用の言辞を弄せんより。花に對して鶴を築げ。以て「松城」の前途を祝せ 調へに和せずといへ。魁春の梅清。馨殊に馥郁。 如 200

ん には。敢て新年の辞となす。

自

めに外ならざる可し。 しより、所謂譽國一致の行動を完ふせんは、町村自治体の如う、地方的団体が、 行を壯にする其一方に於ては、出征者の遺族に對して慰問扶養の法を鑄上、或は又軍資金調達等の場合に於て町村自治の價値、特に高さを致したる所具のものは何ぞや、蓋り戰時に於工民心の撃闘に努め、又は出征者の町村自治の價値、特に高さを致したる所具のものは何ぞや、蓋り戰時に於工民心の撃闘に努め、又は出征者の 意するに至めたるは、著しき傾向に 央有司並 びに地方常 して、甚だ喜ぶ可き現象と云はざる可からず、而して戦争の起ると共に 局者は勿論一般人士と雖当苟くも心わるみのは下大に町村自治の發展 が爲めには、自治体の活動に俟つ所、甚だ多さを知るに至りたる銘々ろの衝に常るを最もとし、便宜且つ其効果の最も著しさもの 力多 D 5

遇することもあらんか、何を大河の本流獨り洋々たるを得んや。 大河に譬ふれば、 とならば、 於て、最小最 ものたるを知るが如きは、迂遠なりと評す可きなり、 然れども戦時の如き非常の際に於ける、町村自治湖体 先づ最小個体たる町村の發展を期せざる可からざるは、敢て 下の自治園体なること勿論なりと雖も、國家の富强を計り、ろの基礎を所謂泰山 其中の最小圏体たる町村は、その大河に注ぐ淡流細川と見る可し、 抑々町村なる開休は、 の活動を見 て、初 評論の必要なしを雖ら めて 行政の範圍に於て、 町村自治体の、軽視す可か 朝 若 し此 ,0 淡流細 將た其 假り 安さに置 13 國家を 機級 川 かん 0 ざる 12

るもの其數法だ少なく、難村と称せられざる迄も、治績の學がらざるものと多らは、誠に遺憾と云人可 村自治体の重 の暴がらざる所以を観察するに、常局者に其人を得ざるに由るものも少なからずを雖ら、多くは町 ならざるに基因する んす可き所以は、概ねかくの如くなりと雖ら、全國 なの 3 基本財 一万有余の町村中にて、所謂摸範町村 必要なるは、 余監の既に第一號の し の稱

(E)

て、初めて之を徴敗す可さるのたるは、市町村制の規定に振り明かなり、然るに余輩の曾て當局者より聞く所 市町村税の如さは、財産より生する收入 を徴收して經費に充つるさへ既に遺憾とす可さなるに、 に依れば、凡多町村の事務に澁滯を來す 財産の收入のみにて、町村の經費を償ふ能はざる止むなき場合なること、果して前記の如しとせば、租税 比々皆然らざるはなしと云ふ、町村税滯納の責任は、納税者自身のこれを免る、能はざるは勿論な に比例して租税の重ぎに過ぐるに悲く場合も、亦決して少しご云ふ可からず、租税を徴收する 、若しくは其他の難收入等を以て、市町村費を充たす能はざるに當り 大原因は、 租税の滞納多さにありて、之が為めに町村役場の忙殺せら て、最も重さを持くべきは、市 况んや重税を課して滞納者を出すが如さに 於 てやっ

遊は此種の自治体の為めに、大に悲しむものなり。 備を備へ居るもの決して が為めに、 つると同時 に堪へざるが故に、今は之を省略するも、免に角に豊富なる基本財産を作り、其收入を以て經常費の機部に充 為めに、村内の里道に三千余圓の橋梁を架せるわり、少しく大なる町村に至れば、完全なる町村立病て彼の所謂摸範的自治町村の標あるものを見るに、戸數僅かに干にも遠せざる小村にして、財政の給 の町村を他山の石として、 すること、尚は市が市立病院を有するが如くなるものも無さに非ず、此の如きの類を一々列撃するは、 或以町村 珍しとせず、全國治績の見るに足るものなき、大多數の町村たるもの、宜 住民の精神的改善統一に要する施設を為し、或は物質上の幸福娛樂・受けしむる、設 参考とする所なかる可からず。 しく正 一病院をも 其煩 なる に此

加納子爵は東京府下入新井村の學務委員として、專ら村治に心に傾けつ。あり云々と、之れ町村自治の為め 治に關する記事の、新聞紙等に掲げらるくこと、漸く多さを加ふるの有様 に非ずして 山梨縣下の一村智議員ごなり、又京都法科大學長井上博士も、京都府下の一村會議員に從事し 下の一村舎議員となり、又京都去界に見たようまで、おは、一村舎議員となり、又京都去界に見たように之を摘記せんに、倉で熊本縣知事た最も注目の價値あるものと信するが故に、今試みに之を摘記せんに、倉で熊本縣知事た 町村に基本財産を造るは、町村自治發展の一大要件なりとは、余歌の宿論なれ

# 自治側の常局者に有職の士を得んてとは又てれ町村自治發展の一大要件なりと知る可し。

C . 1

(左の論文を寄せられたる宮内君は榕議出身刀圭家にして本村に松て久とく其少職に從事し尚潔格の徐專ら智學を請究せられつ、

# 思鄉病

內 盛 直

殿民が 必せり、失れ思郷の観念や尊重すべし、然れ必も若しろの念異常の高潮に遠せば一種の病的機調を譲すに至るふはさもあるべし、日清日露の戦役に大勝利を博せし所以のもの、またこの偉大なる思郷の観念に胚胎せしや 必せり、失れ思郷の觀念や貧 **愛暴の観念はやがて愛國心となり、忠臣孝子の行為となるなり、四面海を以て続らせるわが島帝國に生活せる** 行雲流水に任せたる西行すら、 低頭思古郷とは豊に只に詩人のみの情懐ならずや、是れ人間一汎の至情なり、人情の經綿を度外親して、身を低頭思古郷とは豊に只に詩人のみの情懐ならずや、是れ人間一汎の至情なり、人情の經綿を度外親して、身を 概影聽然をして初旅に上りし人の、 これ思郷病なり 、一たび海を越へて異域に獲得の生活をなすに至るや、ろの思郷の念他の國民に比してまた熾なりとい て去りし 古郷の上にある也、 幾度か古郷に過ぎりて斷腸の思ひあらしめたるといふにあらずや、かくる古郷 **宇夜獨坐殘燈に對するの時、彼れ** 常に想像の録盛に活躍するはわが懐かしき古郷にてあるなり の胸狸に浮べる第一の威慨 、原頂と 泰頭望山月

**随分あり得べき疾患ならや明かなり、わが國民としては海外留學生に於て多く見るべきものにして、神経系** 英語にてホームシックといび獨逸語にてハイムズフトと或はハイムウェーと命名するを見れ うの國民も世界を跨に掛けて活動するの習慣を有し、自然に古郷に戀々たるの情念も薄さものなるべし**、併し世界國民中英國民は思郷病に罹ると最も少しとい**ふ、蓋し英國は彼れが領國に日の沒するとなしといふ程にっ 之を見るといふ、今ろの微候の一例をいはむか、こ。疾患に囚はれたるものは戀郷の情緒綿々として断つ能 属するものなり、海外留學生中獨身者は之に罹ぐもの稀有にして、多くは妻子あり温き家庭を有するものに於 想像は想像を生みて遂に不眠に陷り沈鬱となり、戸外に散歩するを厭 ひ、一室に閉ち籠もり は、泰西に於ても .

(E)

の家庭に送くるべ

名手

て危篤

の状態に陷るも

のあ

5

8

いんい

かくて青雲の志も遂

腎なる

の研究の如きは、到底度外に措

措含て、先づろの地の人情風俗を観察し、 極めて稀なるべし 可とすといふ、か 係すべきものなる の傾きあり、わ なるもの、一は古郷の事はさて措き、 一は新に渡米せる人に對しては切りに古郷の状況を質し、 たれ、 ざる可らざる H 力多 憫れ颜色なさに至るは、以で天下に誇るに足る、由 是れ氣質の然らしむる所にして、蓋し甲は思郷病に 國民は一般に感情に富み、一朝熱烈なる忠君愛國の至情に鞭つや、 洋の天地より俄かに人情風俗異にせる 遂に 歸し空しく管を負い て向 が國民にして思郷病に罹るもの念さはまた先天的氣質に依るものなるなからむやっ に何等 至る、之か為め身體は日に裏弱し 3 べしど信ず、 , 面 0 上的活動をなさむとせば、少しく L 如きは多少何人にもろの傾 かの機調を起すに及ぶは無理ならぬとなるべし、之を以て遊學の當 て該 3 息に罹るはろの境遇に依るものあるべしとい 開説く渡米して各種の質業に從事するわ 歸朝の途に上るも わが事 遊樂に依り 業の發展を說き、事業の 異域に獲獨の生活をだすに至れば、 向あるとしても、該思に惱みて學 のあるか如きは笑止 ていに願みるの必要なか 來政情に富むるのは冷節を欠き、理性の支配を無 思郷の念を他に誘致し、 そり得 知已朋友の べきもの、乙は該患を免るとものなる 0 13. 世界に覇を得するの强大國と 想を喋々し以て得意とするものこれな 情を探ぐる等母國を思ふの親念轉れ切 至なり、 1818 同胞中にも二種の人物ありといふい らむや、 以で該患の崩 一術の研 いふべ 尚は他に先天的氣質にも關 吾人は世界的大國民と 究を放薬する私のは 初は學 らざる或る欧 生を類防するを ~ 視する 1800

するの勇氣を鼓舞し、 の問題は別として、 地あるべきを信ず、 わが雑誌柁 彼等をして病的に陷ることなくしてわが 焼がわ が同郷の遊子に向て、偉大なる慰籍を與へ、各自理想 古鄉 の消長を顧慮すると共に

内外相呼聴するの活動機關となるや信とて疑はざる也、

へ左の論文を寄せられたる濱田奥一郎君は元と铭城出身の秋宵家なり!が其の数年前前:犯されて中身不随となるや護書の俗相橋間を経 糖して足一歩と門外に出す面も居常一村公共の事な念して忘れず若し審到れば議論風景語も當年の英氣衰ぎとは恰然陀域の外川翁なり

# 1

田梗

村有志の間に網道せられたる村繁榮策上最も然りとなす 個人の装飾あり一家は一家の装飾あり一村亦自ら の裝飾なかるべからす國運發展の今日殊に昨今我

工事中の裁判所は本村表立關に於ける一大裝飾余張は多大の希望を属す中學校の燒失情みても及ぶなし數 社公園等の如き我村今日の事情到底很 村装飾として誰れしも先つ想起すべきは公司寺社官公署等の建築設備の宏大壯麗ならんを望むにわりされ しめんとを希望せさるを得す て乏に其坩築を待つ位の外、 べき日く余は村内富豪諸氏が其谷 一面村裝飾ちら事に念到し . 經濟事情 村装飾として差當り希待すべきもの幾何もあるなし然らは途に之を那邊に 自の必要に於て快樂に於て營利に於て家宅の建築事業の經營等をなす かに出來得べきとにあらず官公亦官署邊の総合を幸ひ の許す限りは可成其規模を宏大にして村内各所に出色の壯觀を現出 するのみ幸 に一つ を寺 に當 か求 ~來 せ

ち富豪の富豪たる所以にして又能く 産家の列に加はるを得るの人何ろ區々田舎生活 想ふに義捐を説き共同事業を云為するが如きは事甚た迂なり余輩は勸む生れ 如き財産家としては余輩は余り目出度からざるなり よ而し が如き自 . 道樂といはず必要といはす其規模を大ならしめ 巳の希望を十三分に満すの一端を視做し常に以て村盛哀の運に其身を開興せしめんとを期せよるれ 其而目を發揮するに足らん彼の金利の計 は甘んすべけん宜 よ序に向太三軒 しく其門橋 阿蹄 へを高 算の外他事あ で今日の りに至る迄下 肚にせよ其家宅を宏大にせ 感世 水道路の修築をなす 12 るを知らざる 逢い頼さ へ一方財 80 en

せられ 否な本村時代相應の仕事としてたし 余は此の見地より 昨今加治不町に於て評 して佐藤氏の製糸場小杉生駒両氏の龍門県江の經營曾木氏蛇尾嶽の別莊の如き無鳥里の 判 80 かに村装飾の一たるを失はさるを信す た 3 田中小杉両氏の建築余は其少し 12 諸氏の徳之を多謝す請ふ奈奮勵擴張 てる肚 大にし て網掛橋畔江湖街 編編

宜しく聞くべく宜しく見るべくして未た何等の見るなく聞くなさは春日寺瀑下の逸にずある否な怪むは罪なり う望ましけれ思へは我村の裝飾も公私に追々を現出し來る亦頼もしからすや獨り怪むべきは其位地の最上無類 巳に其計画あるやも知るべからず 上に於て堅固の上に於て規模の上に於て村裝飾の上に於て格別價値なるの設計は比較的價値多る方面に轉用て 一大肚親を添へんとを希望す者しろれ四方正自社 一本何十金といへるが如き單に金額のみ多大にして實用

之を友人長谷場氏に謀る氏返書して曰く君未た知らすか擅田巳に肥後八代の富豪某氏の所有に歸すを嗚呼るれ 余は此稿を終るに臨み我村財産家の大道樂大起業を試むべき好適の場所として白江鎮川の調査をなさんを欲し 然るか榕城の里一人之を所有し得るの人なかりしか余叉将た何れか云はん筆を抛つて轉だ恍然。

# 國家より見たる農業農業者及農業地方の位置

業務に從事し得る所以のものは以上の必要物件を農業者が生産するからである、上古野嶽の時代に於て各種の の必要物件を誰が生産して臭れるか、云ふ迄もなく主として農業者である、今日農業者以外の人が専ら各自の であつて人間生活の基礎である、生活の基礎定まつて初めて國家も成立し一國の文明も發達する、然らば之等 在り今日は工業の盛んな時代となって來た勿論工業は國家の存立上必要である、而して其原料は誰が供給する の基礎と云つても当言ではあらまい、實に人間生活の基礎を生産する者は農業なり、一國文明の基礎は農業に業行はるらに至りて初めて物体の交換始まり今日の文明を來たせしてどは歴史の證する所にして、農業は文明 が備はりて初めて人間は兎に角生活して行くことが出來る、然らば之等三者は人間の生存上缺ぐべからざる者 食足りて酸節を知ると云つてある如く農業簽達し、衣食の根底定立り其結果人智を開發し、路種の事業起り分 楽起らざりしは主ミして當時の人類は衣食住の為めに其全力、尽し他を願るの餘裕なかりし為めである、衣 一番必要なるもは何であるか食物である、其次は何か衣服である、又其次は住宅である、これだけの物 在札幌 農科大學

るまいが、以下述ぶる種々の條項に依りて少くとも現今に於ては農家の多數なる事も関示にどりては重要な事 の度を異にして居るものを云はねばなられ。明治三十八年度の農商務省の統計に依るに本邦全月數の六六、九六 ば最も多くの影響を観家圏民に及ばすかど云ムに農業であらうと思ふ、然れば農業は他の二者に比し多少重要 と思ふ。 工産物である、以上の三事業は國家としては併行鼎立其間に輕重を認めず、然るに、以上の内何れを衰退せしめ のに過ぎない、商業は又國富の堵進上飲ぐべからざるものである、而して其商品たるべきものは殆んを農産及び ーセントは農業者(専業策集両者を合して)である、敷の多いのが必ずしも関家の為めになると云ふ現由はあ 之も主として農業者である、農業に其原料を仰が以工業は陶器金物摺付木樟腦及び兵器襲造業其他僅か

に示さむ 單に生産 力の上より観察する時は農業に全生産業中五首位を占めて居る、今某氏に依り三十八年度の統計を左

工產物 農產物 五八七、〇二一、四九七 七八、一〇九、七九七四、四〇% 九六三、三〇二、五六一圓五四、二四% 四四、〇五%

> 林產物 水產物 五一、六三六、九七五、 五八四二 = H. 九四0%%

輸出品たるを失はないこどは某氏の統計に依り明かである。 輸出品としての農産物の位置は第二位にあるが之は國内に於ける消費多さに原因する てどい思ふ、 見に角重要

一六〇、〇〇〇、〇〇〇四 (三十八年度) 九七、000、 000

續產物 林產物

11, 1100, 000 \* ×00° 000

八、000、000

萬圓、內租稅二億五千九百八拾萬圓、此の內農業者の直接負擔額は六千四百四拾四萬圓である、今此の負擔を 本邦の財政上より農業者の位置を観察せむに三十九年度に於ける政府の歳入としての豫算は四億九千四百七拾 比較す れば殆んだ其四分の一、歳人全額に比すれば八分の 一扇になる、 て國家の收人とし

(九)

**壱億貳千貳百六拾八萬圓であつて、全租税の四割四分餘に相常する、故に實際は全租税の半分は農業者の負擔** であると云つてよろしい。 の上より云ム時は農業の行はる ·地方(田 (含)に於 . は 都 合よ 9 的多 い(重に男子)特とし ~ 都會

六パーセント以上なれど)として計算すると四千八百貳拾四萬間となる、然れば農業者

、此の内農業者の負擔を軽るく見積

、と四十

バー

セント

(實際は六

が直接間接に負人所は

他間接税として一億或千五拾九萬間ふるが

人口增加 業地方 國家が世界に重さをなす所以のものは富力のみではない兵備が 承認する所であるが や消滅して跡を止めざるべし」と迄極貧 に一種 は明白なことである 地と云つてよろしい (1) 著しさてどあるは之れ田舎地方より 獨逸の或學者は「若し田舎より人口 に在ると云小事である、 の元気がなければ土偶も 、然れば農業地方は勞力の供給上及 、今之等の事質を一 今若し他の凡ての事情が 微兵合格者的田 同様である、然らば順民の元気は の移住者 寸經濟 上より観察 0 供給なかり て居る位である 同一なりとすれば勢力の供給多ら國程生産業が盛に起り得可も して居ると云ふのも最な事かと思ふ。 合に多さは統計 に依る F. 80 び都合 は -して見る 且又田舎の人は永生 千八百十六年 12 之に伴はねばならね、所が正備完全なるる関民 0) の人口維 示す所であるが然から体力强健なるは想像 何所に宿る て一般より云太時は都會の増加 ならば田 持の上に於て必要と云はねばならね。 に在りし獨逸都會の人口以今 舎は生産の一要素なる勢力の給源 かと云ふに戦場に於ける質験上農 をすると云ふ事は一般に人の は少い 日は早 に其 0 であ

除りに低く を想起する 以上は農業農業者及び農業地方の國家より見たる位置の極く大器を明にしたつもりである を改むると共に農業者の自重心を抽出せむとしたのである。され らぬ所であつて、 毎に農業者万蔵を絶明 つて居 る様な成かあるので、質は熊歎の除りわざ 一國の元氣此所に伏在 せざるを得ない、普通一般の人否恐らくは農業者自身でご 必余は次 一農業者の田に水を引いて一般の て農業関本論者ではない 力多 . へも自分の位置を 余は之等の 人の誤解 郡項

史

に於て避化し、其墳墓倚臣存するし、風雨多年、只だ自然の荒談に委 唱道せし年度、意之、如竹の三県駒が、皆な晋が議人なるのは實は、張 思網に影響する名次して鮮少ならず、面して本邦にかて、始めて是な らん、夫れ朱子振の學說は、徳川時代の精彩外を支照し、延て現代の に演詩数篇を寄せ、更に又本篇を贈らる、以て其人品を想見するに足 感慨の余、故て舊首を汚す、多即々々(一郎者) て其修記が密にするもの、面りて診さは釜し結々だる先輩の武動に 天樹平原氏は、前鏡に紹介せしが、く、當時終題異なり、かれて、文海 して順みず、磐で香花が捧げて、古像人を吊ふものなきに於てかや、 原氏に對して、多謝措く能はざる所也、沢んや文之和尚に、否が乾坂 眩惑して他無人之共二、薩州か以て単に偏武の國なりと心首信するも 人の光祭さして、鳥んが天下に誇っせざるか得んや、而いし強人にし によりて新の知き無界の像人の紹介せられしに の多さに、 嗜ありて、公符の余暇、時に胸狸の間日月な詩文に托し、誰に本誌 戦由せずんばあらじ、古人窓に之か然みとなせり、今水籍 、年人民族の努め

# 附柱庵文之との關係

原 天

**き如竹の事跡を探開したり三雖ごも記録の徴すへきも** 其郷里安房村を過ぎ本佛寺に謂り其墳榮を掃ひ付内古老に就 開なる如竹の經聽を識らす常に遺憾さす往年屋久島に官遊し 近古陸藩に三大文僧あり桂嵬女之如竹是れなり然ろに余の客 のな

> 奉甚なり 從ひ雑誌柁城に寄す儘し青年諸君老古資料の一端ごもなら 既に供したも素より誤器なきを保せすこ鍵でも両翁の勧め 為し跡偶を如行の事に途ひしを以て余此舊稿を筐底に探り消 最何の念禁する能はさりし其後個々窓畑泉安集中に如竹の略 でも其遺文を讀み切 らさりき近頃棺城の先輩新納柚本両翁三陸器中興の人物平 經歷の一班を記し他日研究の材料となし置きたり然るに圖 北梗概の窺ひ知るを得たり依て貧略傳及欲文口碑を参照し あり又諸家人物は斯文源流等に如竹の記事あるを散見し期 機に媼翁の口碑に由りて其一班を知得したるに過ぎず然 何に郷徳の高き人物なりしかを想察し登 20

佛寺に 書の に上り にし 出籃の譽あり 佛を捨て より敗亡せ 如竹は大隅湖屋外島安房村農家の人なり一説 工とあり其組 大に整賢の學を究めんとし福州へ航海の途上遊風に 朱子新註 なり て如 本能寺 人 り日 如竹 儒を學ふの志を生す是より は還俗後 連宗の・ 平家の 一日往ひて之を聴き大に に制點を下して之を鑄す都下聽聞の徒甚 しと云ふ時に本邦有名の鴻儒藤原惺窩四 12 先は明確なちすを離をも誇永二年壇 入り 法華經を學太强記理解 小僧となり日章と稱す長して京師 の雅號なり十五 将某の後裔な 前き惺窩明國 六歳の頃 6 威悟 NICE する所 ム俗姓は泊 同歌を壓し 安房 に父は松 に渡 村木 の浦 あり

たりと云ふ寛永七年高虎卒して嗣子學問を好ます辭 色云々とあり祭するに此の元江は僧玄恵の誤 とす元和三年長尾某梓行の四書朱註道春點の窓尾に日 之點の四書新註(同二年梓行)砭愚論恭畏問答等の版を 如し南浦は釋文之の別號にして羅浮は に或日如竹高虎に向ひ 言を容の遠く翁を招きたる所以なりと云 京師に出て釋桂庵著述の家法和點(寛永元年梓行)文 へて傍飲の徒に至ては吾れ其人に乏し なり其後文録三年鹿兒島大龍寺の ふか故 必も其歌たるは一なりと直言し左右を驚かしめ 犬なり人能く侮る而 行す皇 て譬へん 知らず又忌諱を知らす 時壽朱註於御莚近代南浦劍加訓點羅浮復 カ> なり其道を行 らず とも **岡四書新註周易傳義の板行は之を嚆矢** 侯之れを寛し給 るは誤記なる に君は虎狼なり人畏ると事甚し臣 人 はされ の禽獣と異 して其役はること悔るとは は人たる 今候の招きに随す言 へと云ひしか し如竹高虎に向 學遺便聘之翁始 なるは能く人の 第五世不問和 から ~ 6 ことを得す しとう ず 吾れ は高

渡り 美行少からさりし 時玩 來りし時信者梁澤民と値ふて互に經義を討 然遇破格なりしど云ふ又一説に光久江戸に在りし時 公如竹を城下に呼出し鉄三百石を與へ常に講談 と施すると始めの如し斯くて寛水 竹の學徳高さを敬重して順天庵と尊称 と比類なかりしと云ふ其後中山王の恐請に應 適余年を送りし が如く逝去 に如竹を以て答へられ 35 らす如竹文之點の四書新註を與へ始めて和訓を解す 行の始めは寛永二年なること推知するに難 の餘りを親族島民の貧しさものに分奥 して屋外島に贈り常に仁義を説の愚蒙を啓發し又体 至らしめたりと云ふ二年にし 王の侍講となり大に優遇を受く其翌年明國の使者 球未た文教開けす經書を讀 に今儒道を學以んには離れを師とせんと問はれ 師順とあり此の文に依 したり 留ること多 7) かは島民其芳徳に厳善し尊信する 明曆 と云ふ享年八 したる文中に四書 元年五 年に しより侍讀となしたりとも云 して又屋久島に踏り悠々 む皆漢音に 十五 の末年藩主島津光久 て考 て屋久島に踏 有六其墓は安房村 日病なく ふるる したりと云ふ し其他慈善 論す澤民如 L し琉球に て和訓を を聴き り除録 らす て眠 此 2 0

本佛寺にあり詩文十余篇ありと雖必る今採録也す

は尚舊首府にて人口十萬を有 ず後 て らず候では旅行 船の便利も有之候へ其、 府以揚子江流域に位 十日を要し當地より八日 慰籍にて大なる 胞を有し、四十五日後れの新聞にて組國の狀を知る至りに存候、實に茫漠なる高原に睡臥し儘に二人の 又雑誌柁城の出刑を見るに至り實に我郷の爲め慶賀 り術なき當 前器)此節は御盡力に依り加 9 斯く交通は至つて不便にて未だ文明の曙光だに接せ日を要し當地より八日道の鎮遠府に達するを得可く 現今清國貨州省貨場府師範鄰室教智落合於光(舊名中之丞)君より十 候で 六日を以て發信せし墨底居士宛通信の一節、 し小生等以外英佛人 鐡道もなく馬車 四十五日後れの新聞にて組國の狀を知るよ 現 北京政府科 にては、 も出來ごる次第 成湖 し隣省湖南省 2 もなく只馬の背 以て拜見致候(中略)常貴州省陽 此の如き郷里の福音は何 12 北上 る布敦 留學せし者も漸 の制を廢してより 流は板付 12 B 御塵候 高め敷 の常徳府迄は我邦汽 船にて 7> の貨 人の肩かに依 -組織せられ 多 然 近頭學校 物も市上 遊り四 も此 う込み り來 よりの 0 Ti. 0

もあり 家さへ有之、 は父子共に手を連ね同學校同學級に入學し來る大 為め盛裝せる優物轎子より出掛け申候、其等婦人の衣居り候、四五月頃郊外桃李の花咲き乱れし頃は慕念の 燧豚卓上に列べられ場慣れぬ紳士は只驚愕する事 支那料理の如きも数十種の料理交るノ 的に大雅派に御座候、一例を舉げ申候は下八人 はづかどき性分 服は西洋の男子夫の如く上衣とツボンを穿ち此等の衣 有之候、儒教は本導國史けありて男女七蔵席を同 すのみは嚴格に實行せられ、爲めに酒席に女子 は女子は夫れ以上の裝飾を施す必要あることと 服は皆花漠様有之候、然し男子猶色着物を着し申候 の社會は男子の獨り舞臺にて女子は奥深き所に潜み 我大和民族の如 又路上及家庭にてい女子は形を願はさず候、殊に支 甘きるかり瓜の種子さへあり、又頭や足付の丸 神共衰弱の状に陷り居り候、元來支那 家屋と云ひ其他日用什器と云ひ総 く譲進的や神系質の点は無之、 て物に迫らず自ら中華國民と威張 一出で來り離さ の影な --~ 大陵 度量 或時 人せ 組 ~

> 西洋の婦人服は支那の男子服に似 人服に似ると、全く此の如きは奇異 12

すべきは我國の商人以上と存候、 らぬ始末に御塵候、質に腐敗ら此の所迄至れ べき点 たる時代に御 き改革と圓滿なる運行を果し得べくら無之、 立憲云々申居り候へ共四千年來の 連命如何かど存居候、近頃中央官制地方に制の改革及 些興するのも有之候、當國一般最も大なる缺点は傭兵 制度に依る弱兵を養ふ事にて一朝有事の日は老帝國の て武参萬両(一両我壹圓五拾錢に當る)を出 比較的善良なるは商人にて彼等の團結力及 かと存候、數へ立つれば澤山面白き話は有之候 態は賄賂公行やら賣官の制やら全く は之にて御免職り候(下路) 塵候此等は東洋の先覺者が宜しく注目す 一般に 情力は容易に花々 金抄多く一人 所謂混沌 心學校な は十 L

なるが香環で其見か関ふするものあるにより之を掲ぐへ一部者)

大阪通信

報とすることに候、即ち政治的 報とすることに候、即ち政治的方面例へば第一に村會前略)小生の希望を申せば此難誌をして加治木の準公

は進步 種なてとを云ふようなれぞも若い人のてをはぞて馬 郷の些細な配事が妙に威夷を惹くものに候、尚ちど小 でも彼でも記載して貰い度い、永く旅をして居るど故 生死亡結婚往來丁度万朝景の公人私人欄のように何 の確實なる歴史とも相成るべきかと存候、第三には出 参考となるべき統計を掲げ、尚前年との比較をも示さ 田何程、烟何程、山林河敷道路何程、此國縣費負 な各種の統計表を掲けて貰い度い、例令吾村の廣さ内 ては紙 營業納稅額人員、 至つて老人臭く候へども長く國を離るれば若い人 高何程、 為替振出拂波、 年齡別病名別、傳染病男女別病名別、郵便電信發若 幾何、戶口數男女別年齡別、出生率男女死亡率、男女 れの息子とか弟とか云ふると迄附記して貰い 僻任、其他一村の自治に關する政治的のことを か退歩かを一見して知ることを得、又將來吾村 應業何人、從業者何人、一年紙產額何程、格 て賞 だけでは分りにく 鑄物及物陶器類も同上其他各方面に亘 停車場乘降人員、所得納稅額人員 村豊の負担額、警察事故産業にあり 第二に年一回村勢一班と云ふよう ~ 面白無之候先づ小生 5 0 in

松城に向て望む処の右三点だけを申述候。

### 松城の發刊 を説す

策を講せんとせば、先づ其の單位たる一郷邑の刷新整 此の特人として誰れか其勝を断ち誰れ 古の快事なり(中略) 我が郷邑加治本には同郷會なるもの組織せられ、 層其の版版の切なるを憂ゑずんばあらず、此時に當り る郷 風月に疎外せらる 機關として挖城なる雑誌發利せられしど開 するが如う 神の慰籍を求むるに由無 の情無からんや、身万里の異域にありて久しく故山 神の盤鏡に映ト する孤雁の哀鳴を聞く、實にや無限の威慨あ を掠むるの音響無きの夕、微かにピアノー 列せし帝國は一層の奮勵を要し而 人の馨唆 万里の客窓祭鑑の秋雨暗く、四隣褒焉と ざるべからず若し夫れ同郷人士本會の に接するには、 錯落燦爛たる満天の星辰を望んでは、一 て須臾も忘ると能はす、然も受意比無 とものと難 况んや日露戦役に由る (舊姓南戶口) 松 L 况 除りに途の悠遠にして心 も故郷なる印象は常に心 して天上の秘密を相瞬 か其故 して宮國强兵の 1 0 悲調に和 强國 郷を思ふ 5, して耳朶 與江干 ろが の仮 嗚呼 0

で近况珍聞を有り体に漏さず誌上に投せられん事切望

悖らず同心協力以て黽勉怠る無くんば、郷邑の繁榮論 を俟たす、 中 略) 聊か所感を記し て祝賀の意を表す

何となく必懐かしき思ひあるを、別んや相互の意思を るる亦珍ならんかと存候、諸君も亦折に觸れ 毎號口給の如きる會員諸君の寫真を片ッ端から掲載す らすど存 時に、 知路 一別以來の舊交をも暖めしむるをやに候、(中略) 通せしめ、十年の久濶もよく一篇の下相親近せしめ 君!「柁城」の誕生は正に柁城の一生面を開くと 一面確かに吾人の「バラダイス」たらずんばあ 候、其誌上に先輩及舊知諸君の名を見るさへ 時に随ん

長の職を務め、常に東西南北千輝萬様の人に接 思ふ所有之解職の上今は同ホラルの東隣なる大坂銀行 長の職を務め、常に東西南北千種萬様の人に接し、最れ笑ひ下さるな諸君!拙者儀は多年大坂ホテル營業部 の至りに歩へす候 洋食部(新設一擔當經營罷在申候得者、路君 なる最も舞趣味なる境遇に暮し來り候處、 へ御來遊若しくは御通過の折りも有之候は「 這度 12

> 昔日を語らしむるに足ると存候、先づは思ひ出るさし 無之候、大阪には自から大阪の趣味あり、ョシャ 非御立寄被下度万更紅塵万丈さのみ見捨 婆酒、一皿のピーフステキは寧ろ霜々たる情致を添へ の珍味はなくとも、一夕の久見卓子を擁しての一杯の 軍に任せて右申述なる事依而如件、 淡笑の間無量の威夷は自から湧くべく、よく十年の 言う 路君幸 てた に健在なれ 30 山海 には

の最下 券賣買日く金銀塊買入日く保護預り等の分類替日く 並為替日く 電信送金日く 代金市立日 日く常座預金貨越日く貸付金日く手形割引 今僕等の銀行に付き營業稲目の大要を記すれば、日く 關に外ならず、而して其内部の組織は稽 錢の貸借を行ひ、世間の融通を計る、 可致候、謂ふまでも無く銀行は通貨の 記述致置き候所、是より少しく業務の大体に付き開 年の御吉慶目出 預金日く當座預金日く小口當座預金日く別段預金 く並爲替日く電信送金日く 級に就る、 筆啓 E 折角事務練習中の趣き前號の誌上に 慶奉脱候。(中路)僕以目今後速銀 (第二回) 在處屋 代金取立日う 媒介者に 々復雜 法便利 B に候い 一く荷為 0 2 一機 金

見島市に は決して軽からず、 馬組合、肥料組合等の共有金及ひ一般公衆との取引等 保險、徴兵保險等の取次或は赤十字社、武德會、義勇艦 廊金の支出、 り、其他專賢局出張所のある所に金庫派出 一厘に 居る故、火災盗難の豫防等一刻も油 ひ夫れ 之を取扱ひ 種類枚舉に追望あらず、扨て又た國税の收納及 ム、非他縣郡村の公金より農業組合、商事組合、産 、愛騰婦人會等會費の取次及以收入印紙元賣捌等を 日本銀行、勘樂銀行、與楽銀行等の代理とし 外は大概樂隱居的に御座候、樂隱居的と言ふる責任 支金庫を派出所は事務閑散にて、納税期及以月末等 あり、 好の取扱を為し、生命保險、火災保險、 ても過不足を生し候では 保管金供託金の受拂等は、 取扱を臨別せり、 、縣及郡の牧支は縣金庫、 支金庫、縣支金庫及郡金庫は各郡 官衙並に公衆より貴重 本金庫及縣本金庫は鹿 断は出來申さず 金庫の 郡金庫の名を 所の設 の物品を預 名を以 2 あり にあ び図

> 九時より る青 らざる 探らるべき事 だ夫れ治僻の地に閑居するとさは社會の事情に通し難 んど為すべきの仕事無之、 安逸氣薬の倉番に外ならざるなり、 節思原 を 進為の氣象と消耗するの恐れあり、實務的映 1 敬活の才幹を琢磨するには不便に候間、血氣経な 關係 の士は邊僻 め、風雲乱飛の 想徐に 士の参考に 午後三時まで諸種の出納を の方面へ報告するのみ、 てて 得策と存候、 部前の精神を養ふには頗る適し候、唯 の関地を選ばずして、 供し奉る へば苦しき思更に無 間に活手腕を練磨する 悠々として獨學自修を為し (下路) か實驗中の所成を述 行ひ當日 夜間に至り 毎日の仕事は午前 しく繁忙 0) 要する の勘定を 方針 掌者と ては殆 0

# 詞

巢 為里回。 信 梅 開 花° \_0 相清於水。

受個浮香撲鼻來。

かれ、年中語め切りにて小心製を守衛の任に當らざ

夜中も安眼を貧らず、父母にも離れ妻子にも

悩み、

カ>

其鄉風其

心配一方ならざるの親なきにあ

大婦に候間、常に嚴重の警戒を加へ、

酒を禁し外出を

\*新春從京

仝

期故國春。 征人雕望或懷頻。皇恩是重輕身命。

男爵夫人

直

子

新玉のとし立渡り御めくみの

浪のとかなる海のれるか

五十鈴川 さよき流れは大神の

大み光にどしやたつらん

松

萬代のかけはるかにも見ゆるかな

拳のいははに生ふるわ カ>

松城の發判を脱ひて

七十五齡 岸 野 七

開け行く御代にちつりて故郷も

あしなみすくむ道が立ちたる

月照上人の五十年祭に寒月照浪と云ふことを

雪雲のはれて浪間に照すなり

さつまのせどの有明の月

房

淡川社の松は年毎に

御代のめくみに色や増すらん 量くに

神なひのうたかねやまに根さしして

君が代よはら千代の松鼠

新玉の 年たつ今朝の雪の上に ゆたけき御代の色や見ゑけん

房

新玉のとしを迎へしかと松に

恒

治

積るもうれしけさの白雪

はつ日さす庭のはひらに少女らか はねつく様の面白き哉

種

B 就

新玉のとしの始のはつからす 干年の松の上に鳴也

切

新玉の年をや脱太朝鳥

常

子

わか門松のうへに鳴也

7)> にる年立 かへる山のはを 乱れていつる村島かな まん子

大君の御歌始のことのはを

城榕脱

とりの歌に晴れ行くさ霧か

砲や晴れ行く

霧の七重八重

十三句

Ш

かきはしむるか嬉し刈売

田 穗

をさな子が文よむ窓をのぞきつく

行 發

客の馬をといむるさ霧 程の故山一帯をは霧か

15 かな

0

か山か霧の中より鐘の音 の松島の水や霧めぐる

柁

干よろづのたからを捨ふ心ちして 断にさへづるひなすい めかな

子(新添和漱) うれしくたとる文のなかみち

冬空は金色なでむ茜して

柑子に日照る目まぐる

月明含湯槽に双手胸抱さて

城

わかき血沙の鳴るをればゆや

句

一聲で年新しや初島

木

かわやにも第目のあり玉の春

元日や無込む風に資舟 さして來る沙の光りや初日の出

(九十)

畑

大 0

來將新

襲の敵を濃霧に関みけり 軍の叱咤の聲や霧動く **職職捻神樂の音や霧こむる** 

軍の動く麓や霧晴ると に出でて嘶く軍馬霧吐きぬ

成り 霧の中より生れけ て霧に啸く 14 カン

一月や襟垢なりの旅衣

E

偶 感 數則(其べ一)

的威化以外、るれに依つて自分が御蔭を蒙むらう 人傑士は素より尊敬し裸揚せねばならねが、併 つてはならい。 やうに威する。古來我縣は多くの偉人を出した、 すに及ばず、我縣の跨りとして、肩身も廣 なくない の文武官で、 依り、 のは、喜こなべきことで、家門 山東鄉 壁鶴接倒の光榮を受け の両 を始り し精神 と思 0

くしい 官に就ける叔父さんを頼らうとする。要職 たちとい とであるい自主獨立他く迄も自分 ◎今日鹿兒島青年の重らなる のやうに期待して居る 居る。ろれ て人を属り、 てを、さる自分が常然得べき権利です 空しく A 奮闘心の欠乏である。 な次第ではない で若しも 他から引立 天を仰き地に俯して其無情を 其望み 。即ち己れ かっ 好叶 てら 欠点 はなければ、 れんてきをの の實 は、 に何等 彼等は稍 依賴心 力を以て他に立 の準 きすれ 12 巳れを責 み型んで ある先輩 るある 備素養な の強きて は頭 嘆る か

多くっ當時無秩序の時代には、一片の情質線故に依つ◎惟ふに之れ我縣からは維新以來政府の要職に立つ人 當時無秩序 の時代には、一片の情

> つたので これは實に鹿兒島人の悪癖である。 も必要である 此弊は免れ 偏へに門閥を頼 25 名門の多く 8 が、全く やうである。勿論或る程度までは傳手 つて行けるも 之に頼らうと云ふのは歌 輩出する處には、 途には習ひ性となって今日に至 のと思 の中は傳手 N 何處でも必ず さへか 修養を怠つ 9 n 力多 6 は

0

やつた、 人の知る 身の一武官は、特別の恩願に預からうと思ひ、同郷の大山大將が曾て陸軍大臣の職に在つた時、鹿兒島 仄めか を振瀬 が前 は居 一士官を紹介し 年の依頼根情を暴露したものである。 自分の浅 0) 15 して其郷國の 武官は大は恐縮して引退つたといふ話は、 い答だが 答だが一体でこの國の人で…」と轉ねたので大將は怪訝な顔して『日本の軍人に外國の人 所である。 一葉な者 53 へからっ 得意氣 如何不 荷くも飛に長たるるの、 ころ、誠に能く 21 大將の氣を迎へて其同郷を 間はざるは當然の事なるに ってれる國の 我が鹿兒島青 ものです」と 唯だ其才 同鄉 能く の出

敬し、ろれに依つて自分が御蔭を蒙むらうと思つては◎吾人は繰り返へして云ふ、授爵は授爵として之を尊

却つて爵位が小さく見る、寧ろ無くるがなどの威撃ろ滑稽に感するが、人格高さ人が爵位を有すれ しき人の有する個位は、個位はかり余り大きく見る の秀づる所、 が近例 カセねば 部分的及且の政略的のものではない ねばならぬ。天僻は人得の如く爾自分は自分の額に汗して自から天得 である。 何處にも天倒はあるのである。 ち天然を得 、荷くも人 かく 成を 人 は 格 不 3 341 5

しと云つて幾多 大に成せらる。 大限 大隅 論吉とあつては、却つて先生 ◎故稿澤先生以福澤 臓に欣慕す 仰にし 12 101 伯は大隈伯で以て偉らい , 战、凡 なるが為めに一段の光彩を放なつやうに 人の に過ぎない。 7 價値が生するやうでは、彼れは未だ人格 ての信位は其光を失ふのである。俗位 べき人格ではないか 若し其俗位がなかつたならば、 の質位を僻して受けなかつた華盛頓は かる 知れねる『我は一市民にして足れり 先生で録 而して其を崇拜する社會は ので、 0 S ので 木 0 飯を没却して了う。 思するに高さ人格 伯 御といふ御位は しも男爵福澤 思はれ 0

吾人は我郷の少 然る であ を埋め したならば、世人は唯だ願みて之を笑ろうであろう。 も實力の人、 0 功名に眩惑しつしある間に、 至 である りに堪ゑない。元動や太將の名きを誇るり 望する に遊脳安逸の極、 つた、故に干戦の後までも追慕の すべき力がなか た南州 3 眩惑の 如き我縣の 徒らに之を誇りとし、維新 我は孤城落日 月十 更に吹き返へするどのな 年諸士が切に思 の最 孤城落日、永き隨眠の結果、彼等に夢醒めた曉、周圍を見過せばいづれ 四日 後は、人事を竭くした崇高の最後 つたらば、どうであらう、 縣下多數 幸榮を脱すると同時 認む 時勢は刻一刻と辿み行 の青年 いを此 が此 3 跡を断たな V 11 致 來羅 やらに切望 2 曾的 n , no h 4-秋風骨 って居 先輩 討死 200 5 1 0 0)

大學に於て專う展學を修めつくあ。と云ふの原稿を寄せられたる本田君日本村の出身 村の出身にこ て日下東京大學理

### ○彗星に就て

(1)

本

H

(-+=)

上の

现山

に依

つかい

吾人は今回の行賞に對

L

.

정 の先日見などのませようことには毎年数個宛發見される遠鏡のみで見ゆる小さな彗星は毎年数個宛發見される遠鏡のみで見なる様な彗星は時々しか現はれないが、望 先日見れたのは世界中で 肉眼 今年に發見され た彗星中 0

接近することはあるまい 通り、 毎晩新聞記者が來て色々 大に陷 なくなった。 ろれ 手に都合のいと 本の新聞記者 で飛だ間違などがある。い を見るどろの話を色々修飾して書 撮った。 頭と尾の二部 で彗星とは必んな物かと云ふと、 り、未定の 九月十日 今後幾百 程常にならぬ 様に事實を曲げて書くのだ。 事を断定して書いたり、又肝 0 な事を開 天文臺で から ものはない、彼等は V V -0 ない、彼等 測中 1 あるが 3 型型 は 翌日の新 為に 3 だらなに 自分

の問り 核と云つて普通の星 関を廻 星は地球等と同ト く発 の本体であ を、ぼんやりした部分が取倒んで居る。 するも 必圓形 の眼 0) に廻 6 0 星の様な光を放つ小點があつて、る部から成立つて居る。頭部の中心に必んな物かと云ふと、肉眼で見むる 見ゑるのは、ろれが太陽ので又非常な遠方に通げて行 ある く太陽の引力 て、見は失から生するのであ 8 力多 のでなく 、ろの廻り れによって、 . · 15 非常 地球等 な遠方 太陽の周 3 2 0 30 でから 0 0) 12 頭 場

分は太陽 や小島位 は 微座が ふる 反機され 太陽 0 は瓦斯 15 W S 1 である つも上 0 0) V 光る様 0 8 vi 一所に澤山集 1 0) 1 n の大さのものも珍しくな 地球上の廃とは違って宇宙 も合んでるのもあるらし 距離 2) 力等 て見となる 0 に見が出 合んでるのもあるらしい 12 の彗星は朝 起 光 12 S 向 か近く なる が近く 32 の証據には尾を通 て居た。禁星の質質は明細 である。 0 つて五 彗星 .0 なると太陽と愁 。足は畑草 。 うの昆 見似て太陽 細な分子は太陽と 一部分は其自身の光で ろれ に衝突する結 は太 で日方も至ているよい 0 い答であ 11 微座 F 間の魔 0 より 無論徴塵とは云 に居 (1) 果とし もなだ 反 になか 00 だか 彩 子 光は一 5 極いも で 3 0 ろんな りつて見 ら機島 0) あ に最と 間に 向に 75 3 部 0 3

世人類 h ると戦争 歌の生存の 出 ~ る戦争はした しない事にいれば ない。書は、これの名は人間の智

3 の機関中 三日 來て を勉めて居る。假令彗星も地球と丁度同だから宇宙は吾人を保護してろの發達を 3 は笑つてる 吾々は太陽 75 市 な機的 30 作用 v は機的のものの 中一最精妙なるものは吾人の頭腦の働 12 瀬没せる で衝突せずに路を譲 て無星が の引 V 3. L も地上には何等の 15 物があれ 500 2 カで 引力の法則 て心配すべき必要はな S 战 ので、 地球の空気の 帝夏秋冬を知り、 與面 は雙方から引合ふ 明ら合人様に旨くな はろんな 目な學者は皆ろん 中に一寸 影響 が働く以のを完全に に窮屈 後を 地球 530 入 知 へて人々は、て人々は ある。ろ 餘裕 以上 で 61 73 8 0 0 ~ である 半可學 て大 引( 街 所し to な事 がはにやう 力居 突す 3 ので で 3

> 震雷火事親爺よりも恐ろしいものではない 空氣との塵擦、爲、其等は大抵燃ゑ盡 か の隕石が降る位のものだろう。 すると特星 して 地上 0 12 は灰地

# 福州雜 (共三)

事以前 の の要 停泊 溯ること凡ろ三十四浬 に航すること凡ろ二晝夜 L 水道口 所 あ 26 に商洋艦隊 襄 戰爭 - 3 14 砲臺 11 L 他盛あり兵營あれ艦隊全滅以來の の古戦 国江 V) 場と 巨船常 0) 根 據 L 12 かりて数百の次又一隻のは地にして最有名の するて 12 12 L U 幅淡 て馬尾に るだ十三時 て此處に到 L 5 片影を 線維常に 船政 0) 所 到 11 局 3 韶 III, 3 間 5 0 駐 海 尾 此 所 べし 3 屯 戶 なり淡 すず は船 П 地 在 瓣 を自地管清と 此 1 今は 3 と船 5 1 b 南 衞 L 戰 0 5

經費不足 創設 尾船 なり て就 なりし爾來今日に至るまでご改するところにして之れが郷政局(造船所)は西藤一千五 21 1 中最大なるを二千 の為め事業の字を中止 今に 尚は佛人 を聘 颗 三十 の開 用 し居れ し居るも創 の任に 餘隻 濟 15 0 常年方 船 す現 しは 宗棠 \*

(ヨナニ)

て天

21

12

なる

花火を見

3

時勿

集合だ なら

5,30

時は

の流星

力多 居 避け ろん

る餘裕 な事は

全く 6

なく

が真向

ら衝突

した

3

地球比空氣

と云ふ厚廿

2

~

ある、

ろの時

12

细 力多

15

なっ

H

をお

おなく

かれ

なくて彗星が

織る 校廟嗣等其建 たらず道路又甚だ狭しと跳 其重なる 水道 萬と称す CX 水 高さ三間徐厚な二間徐 を通り 部門井 如く 商賣繁昌真に首都の名に背 (1) 移 IIII 築皆 のそ で城内逐漕 て総督将軍 肚鼠雄 列記 す の七門あり 大人旦 の便を計 12 日都の名に青から 歌人家和密戸口 ものな 0 5 12 は 衙門を首 を引く 1 の如 る市 て往來を通り 3 15 墨と鉄 足 櫛比 は其馬割整然 步 3 ~ 口質に六 北 文三個 W 88 四門 .

両ム の新 政総 務督 その 統驻 理在 にすす 3

將軍衙 門 る建 滿斯 す田 を巡 州軍 八の 兵在 のす 源 知る 邓所 調 そに 查 統し L 替く 7 すり 州 を課 駐 恒

一按察使衙 **楊道衙** 成を察 の倉 都 專賣に係る擴政を處理す 統衙門洋 庫を管 て罪案を決す 務局學 理して腱線を行ふ 務處郵 政局機

> 廟の最 るるも 12 以上の衙門は皆公衙として事務を處理すると共 官の官邸をして 著名にして宏壯なるは城隍 て林 则 り各省任意に 左 棠沈 住居に 貨幣を鑄造する 充つるを例 0 三嗣は て清 國は未だ統 とす 0 なり面 有 ーせ 元局

と称す蓋し福州城は岡江 3 特に体観なり之れ に係ると若 内に於 石 りて最低く に登らんか幾萬 て三山の如きは適ま此 て之に次ぎ高さ各數 絕頂は佐殿奇石横はり 5 は南 べて最体観 門の西に に足る又両山 に批 2 を白塔寺と称 あり 大なる は 女あ て最 共に 平 0 th D 5 ~ 七層 種々 3 高 て大士殿と稱 4 于 なるの 1 古 に位せる丘陵に過 0 を建 塔其麓に建てられて の文字彫刻せられ皆 へ言ふ度 H th つ之れ は は E B 6 南 す特 たる市 9) 2 製の建築 3 0 0 31 鳥石 3000 街海に 近に to

断たしむ佐倉達山島石山に登るの記あり左に之れを接登ち其景真に佳絶天外の孤客をして職らす望帰の念を

中々面 先生が 寒夜 始と搬 白 N 味なことが載せてあつた、夫れはこをなんかで講演した、「品格と品行」と云ム題で、 想錄を讀む .00 新波戸博士の随想録を讀 夫れはこをなん む。書

中

つたい

数と云 人に 、甚だ軽きもの ひ、品行と云ひ、之をキャラクター 5 、品行と云ひ、之をキャラクターに比ぶれべきことはキャラクター(品格)であり、人 XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX である。

△品行方正は素より必要なことである、 たい、けれども唯だ品行方正は の根 本を忘れることが間々ある。 いからを八釜しく 立しく言つ

. によ 3 2 0 どかい ては極 26 人格の高さを示される 出來る。 く賤しい して見ると此品 動機か らし 00 動機と 行方 iii 12 人をに Æ 行 を云正 H 評 h 2

(五十二)

の動機を見無いと、決外面に現は 行方 正は怠る べからざるものである、 n て其品 人の眞價が分らぬ 17 のみを見て、

かりで往けるそので 品△品格品 格と云ふものを重んと では 75 いい。品行方正の のモット奥がいる、併し同時に 13 12

派で、奥が甚だ年 る。 本品行方正は宜い 迚も濟度す 30 んどを飲んでは駄目 くなつてはい △品行は外に順 12 ろん 奥が で仕録 な局量の X べからざる者だ ット けない ふもいもあるが、僕の哲人に學ん に汚なく、 門の前 いかけ 清潔でなけ D 小さなことで無い……。 だと、動もすると人 0 れども、ろれが為めに人間が 3 何の誰は磁者買をするからモ [21] には庭や肥溜がある 乙は奥がチャン 構であ 、何の誰は酒を飲む、 ればならぬ。甲は門 00 かま 間を小さなる 1 Z 為 備はつて なる 龙 酒な 小さ 775 \*

こつる 士 博士は 士道」 質に博士中の大博士でわる、 54 する迄もなく .0 5 外國ののも哲 日本 學や其他い の學位は農學と法學 のみならず W 武士の 3 つか 英文「 の博の Ń

つたが

-

目下 を言

一點 6

0 5

校長である

0

ヘンい

立派

な緋

士で、

如う

35

つて

3.

流石は

べものが多

V

から、ろんな狸奴

乙な

を紹

殿めし

0)

奥

.

何

15

北云の

15 い門

V

で 標

-

れ是 3 ~

吾輩

いる品

、 行方

本も亦品行

方たの

12 6

反

TE.

だけ

0)

つかいかつ

明治 四十 年度重要記事

八日 8 H H , . . 宮中 午後 若竹 御歌會に 樓に於 の名奏を 三 四時 花城 男子 日食、 . 新年宴會開催、 博すい 本村の の国秀歌人森山まん子明々望観するを得たり て年始會開 0

二日 , 本縣相 橋品 評 會開始

H

网

預選

二十日 廿一日、當中 落成儿 本三月 七八 B 日 H 柚木 府紀念林へ 數 四 F H a B つ月 B を探 議 本日納骨式を行 小學校改正令發布義務以育六年とな野尻文部視學官中學及小學校を視察 錦江義會成立 旅順白玉山 友何那 話を路 雲舍員及 村台議 窩山 士 上慰勞會 京帝國大學総 魯 収 十五聯隊師園長の檢閱を受る為栗野事務官小學校を視察す、・・ 出張し杉樟の挿植に從事さる一週間村長上村岸野白尾桑幡 縣知事川 務所 せら 員撰舉極無事 周 の短艇競漕 し杉棒の添植に從事 開 上 郁 捌 和 文館員 に放 園 す に寄附せり、 陸海戦死者武万余名の納 Ŀ 12 太 長著 . 務敦育 開 紀元節殿賀合開催 111 4. JII 3 100 m 12 博 士 0 加治木中學校を 野 酸謝々 12 るす 7 々西

廿七日、日 て本 島津男尚來加、有志を集め難誌發刊の主意 本海大海戰紀念配宴衛開催 H より往復六日間當地に宿泊 せり

後表せらる H 日本赤十 字社 R院の為慈善音楽 京日比公 一楽會開催

十七日 , 日佛協約發表さる 應見島養育院

九両日、

諾し、 三田 趣旨を述べ赞成を求められ、 . 有志四十余名青雲舍 備 委員撰定さる 古に参集島津男雑誌な た務 0)

廿九日、 大雨各地出 水し川内川大に汎濫す、

H 韓帝位を皇太子に譲らる

四日、日四 島津男雑誌初號發刊の件に付來加

龍門庵に於て男招待會を催ふす、

日韓新 協約成り政機器く 我有に歸 し帝國 0.

宿

H H H 岩脇郡 雑誌松城第一號發行、內外に歡迎さる、加治木驛に於て名物加治木饅頭賣出さる、 長 任 12 付郡 內 有志 より 送別會開始

(七十二)

廿二日、 長裕恒重節氏の慰勞會 H . H . 男俗母堂の御葬式執行 新任姶良郡長大山綱任氏の歓迎會衆前

# 中四日 七日、韓國皇帝即位式舉行校に於て同窓會兼有志懇親會開會、 h 日 夜箱館大火七分位燒失復舊容易ならす、 關西期東地方暴風洪水あり損害莫大、

廿七日、韓國皇

九

B 二百十日全國極平 程 大慶々々、

十一日、日露通商條約發布さる 東北帝國大學農科大學開校式舉行

日 檢閱使川 村大將着慶、

將は伯爵に叙せらる、 常記親授式を行はれ伊藤山縣大山 侯は公解に 東鄉大

の三十年忌法事營まれ上人忠僕故重助の未亡人京廿三日、鹿兒島南洲寺に月照上人の五十年忌及南洲 より窓合す 翁

五日、 日 縣會議員選舉執 南洲翁以下丁丑役戰歿者三十年祭執行 行

十三日 皇太子殿下韓國へ御發途遊はさる、 陛下御生母中山 有爲含に於て同鄉會の發會式を舉く、

一位局奏去

七日、 六日 次宿泊 丁丑戦死諸士の招魂祭執行、 五聯隊全部機動演習の為熊本へ出向の

廿八日、 廿六日、 高屋山陵へ御代拜使を差遣し給ふ、 午前 太子殿下鹿兒島に御着遊はさ

名古屋開港勅令發布

三十日、皇太子殿下鹿兒島港を御發艦遊はさる、廿九日、加治本各小學生皇太子殿下奉迎の爲出魔 十一月

午後錦江義曾發會式を舉く、 日、天長節の脱資倉を奉く、

なるっ H 磁島津邸東宮殿下行啓奉祝の大園遊會を催ふ

祀祭を行ふ、 日、成辰役職死者四十年祭並佐賀乱後戦死者の 合

十四日、 雑誌乾城第貳號發刊

五日、

邸、皇太子殿下行 啓並嗣子忠承公御着袴の

十二月 本縣第一回馬匹畜牛其進行開 日、忠重公海軍兵學校を御卒業 损

通常縣會開會、 総裁開院宮殿下御臺館なし給ふ 日、赤十字社應兒島支部総會服國神社境內 21 188

於小濱犬堂別邸開委員倉長亦 准数自養成誘營會開始、 ※隔遊ばなる

十二日、練習艦隊橋立松島殿島三艦は去月卒業の候補 八日、 廟前に於て歡迎會問催、 生を載せ魔港へ着す忠重公亦一行中にあり午後照陶 東京並鹿兒島に於て故久光公二十 年祭執 行

十八日、 廿一日、村曾議員村吏員學務委員谷小學校職員の忘年十八日、韓國皇太子參内両陛下と御對面遊ばさる 十三山 會兼題親會を天理教會內に開催、 磯邸に於て練習艦隊乗組員歡迎園遊會開

廿二日、 島津會長本誌編輯委員及編輯を扶けたる者を

慰勞旁々忌年の宴會を天理教會場に於て開 カン 3 .

小學校職員生徒、各關体員、其他、一般停車場及其附近前十時當驛御通行相成るとの報到りしかば、官公吏中 に整列して奉迎し、数十後の煙火を打揚けて敬意を表 落陰せり、 などしで諸般の準備遺域なく偏すらに其の日を待ちし 事とし、十数日前より其準備に着手し停車場附近に 差遺はし給人との事にて、加治木村民は千載一週の盛昨秋皇太子殿下御來腹の折、加治木中學校へ御使者御 総門を設け、道路の修理をなし、御旅館を犬童宅に定め 昨秋皇太子殿下御豕鹿の折、加治木中學校 終に御來駕相成らさること判明し村民は大に失望 而して午後御歸途の際る奉送前に異ならさりさ 然るに高屋山陵御代拜使有馬侍從廿八日午 山陵御代拜使の御通過

●擬資珠橋の修理

の御建設に係る有名なる橋なるか、爾來年を經るの久 しき破損せしを、六代目兵庫錦水公の代修復せられし 擬資珠橋即ち欄干橋は其書慶長十一年義弘、家久両公 れ質に見苦しき体なりけり、 後又破損し、明治十九年有志者の寄附金を以て、 したりしが、又復毀損し幾年の間其後々為し置 抑該橋たるや誠に由緒 之

> 派なる玄関口となりしてう喜いしけれい せし、修繕すここと、相成り、今は元の形に復し、立あらんことを祈り居なるに、今般東宮殿下御來慶を機 上相湾まさる事なれは、心ある者、一日も早く其修繕 ある橋に すれば、破損したる儘に楽置くは、 て、且加治木樞要の位置、所謂玄關口 第一加治木の對面

●赤十字趾鹿兒島支部総會

員間山秀延氏は今般金貳百圓を本社に寄附されたる も百余名参列せり、因みに吾が同総官長島津男及 無慮八千余人に及ひ看有の盛况を呈したり、我村より 長より章紀及推薦狀を交附して式を閉ぢたり、魯列者 下より有功章及特別社員章を御親授あらせられ、副社 晋最朝かに、台旨を賜へり、支部長之に奉答し、次に 小澤副社長の脱詞、坂元社員総代の脱僻あり、次に慶 會を宣告し、社員表を奉呈するや、 下には投くる玉 長小澤男、鍋島御附武官等を隨へさせられ、干頭支部長るや、前日を以て御着慶の 総裁開院宮殿下には副社前十時鹿兒島市照國廟前に於て開かれたり、定刻とな の御先導にて御盛臨遊はされたり、是に於て支部長開 本赤十字社鹿兒島支部第二回総會は去十二月一日 特別社員に推薦さ n たりと び合

白蓬城是石池原

盛左市快安直耕

衛門二房光一夫

仝四仝仝仝仝州

年三月

箱

常務學務

長

谷場

⊛村會議員

七年三月就

소소소소소소소

仝 仝 庶稅衛底衛月任農潊吳翁底

比有

川原

七年

年

年

年

年

志島

H

八 + Ŧi.

年

九月 二月

3

四十

年二月

源之丞助

助

年二月

八 七

年

月

役役長●

四

を賜 待ち奉りたる とそ ż Z. 受けさせられ 鍋島武官以下 在鄉軍 ~ 同鄉會 へ向け、 したる 一般は停車場及其附近に整列 31 12 12 を随 -, 軈 對する特志家 御發漿遊ばされ 御嘉納相成りたり 御停 よりは當地名物の饅頭と密柑 . 御着あり 殿下には 新納大佐 た 3 . . に拜謁 社: 員生徒 長、 熟城 -. 御言案 萬歲 なる数 Ŧ 頭

校訓導緒方英吾氏は 衰を以て念とせらる 之れ 12 本會報に於て報告せ の芳志を謝す。 三之丞 ~ -加治木を以 に本會員 斯の如く 別府茂造の三教育家は、 各金五間を寄附 12 し如く 本台の發達を助成せらる 列せられたり。 購讀を希望せら 山小學校長厚地政 由らずし て第二の故郷となし で何が、 大山 木 郡 諸氏は元來他 規定の含要を 稲氏は 茲に特 集院 秀洁 の感 3 は

共の為め 75 0 せり 心 へ問 間に該村公益いの 實費を以 -氏は有 望 5 -郷を盗ふと、 0 め 子 好 ŏ 1 12 L 12 洲 < 北本 美字 3 べき 関 村公 28

新

其 同新 の厚 豫 に答附せらると云ふ て報せし 聞 社 意に對し、 本誌初利以 処なるが 昭 12 深厚の 香 0 爾 -後發刊 3 A 謝意を は吾 大の 办多 0 表白 本誌 意を寄せらる 同郷人士を共に、 口 給は るは

村勢狀况

明治 同氏任を辞 -12 ~ 左に現時村勢の 池直 本村長の職に就る、同廿 廿二年四月市 して職を退さ、 く治全り 村長代を重ねる四 一氏之に代り任を重 二年以來今日に して全年六月現任上村與八氏之に代はれ て自治の質を撃 概要を 町村制質施の際 15 本田克氏出 從來の治 . 至る ね 六年五月期 移 ~ て全州六年二月 更減以 に常り石神安光氏 の間年を經る 後を綴り州七年五 至 満ち ~ 任務 ~ B 在職十 職を去 に強り えと十

置町 き制のの H 土

三年四

月

生 に依 0 竹田 為 3 屋 め尽 DE 金善 新平 袈 カの

原摩名反臨流場 選舉を以 卅오소四卅소四 九年三月 十九 + りの谷字 年三月 年三月就任 12 武名

通村園村上下田下田 金右左吉與竹右左藤與装善甚左清源誠 次衞衞次兵五衞衞次 次 四衞 郎門門郎衞郎門門郎八郎藏郎門助助助

小仝加仝木仝反 Ш 級議員 治 H 木 常数薬御の常数委員 **仝소소소**四소소소소소개 七年三月 年三月

九四四六四〇一

合其日車營僧神公教官漁工商農糧 金金或藏或藏 一三四四 親住戶口 現住戶口 目 戶 貳萬貳千叁百六拾七圓五拾八錢六厘歲 出 武萬四千四拾壹圓拾壹錢六厘歲 入 lif. 計他傭取業侶官吏員吏業業業別 24 一 事 業別 五二 業別 五九六 三九 九〇 算表 二六 人 人 大 大 大 七 二 七 七 二 三十 二人八 五象 一四三四五一〇 1四九〇〇三二〇七業 九年十 0 經常費豫算 一月調 五三計 二六九四〇〇六計 第第第 黎圓五拾參錢 時要豫算

畑宅 田 全全全教日小西加木反 木山別治 員山田府木田土 仝日仝西仝 月學 で被令の定むると 別府 木山 别目 高見、九、七、六 步 大型、五、0、三五 二大大大五、0二 反 14,0,E,10 開き教育 上の事り 吉松岩東東 木美上原谷竹木小杉長 N1.52.12 型·器二人公 二人又至二元 二、大名·三世 谷 村元崎 場坂野田口下下杉田場 長袈 吉恒 を左 仁吉善定金尚左右平唯 之之之 次 德衞一 助助助吉郎幹門門郎二 左娑伊仲左衛太兵次衛 協議奨勵 門内に関 門郎衛郎門 年十二月調 四州四州四 十年五月 100,446. H 少粉 十九十九十 七年三月 る負 年年年年年 微 月月月月月 あ 9 一、五七八 就 二 人納 三 人員稅 遊病院敷沼 敷用漆 地 水 路 地 水 路 堤防敷 地學教公官有地數學 合日小西加木反木山別治 計三、咒四、八、八、〇四 計山田府木田土 四七六、七、六、〇九 人口本籍戶口數 二、六、七、一五 四一二二六五六 飲入〇七六二三七 飲一入九四九〇一 一、八、九、五 六六六三 三五、吴 九七、九九 1001 郷以下 三〇九五六七男 000三九三三 一七二六四二〇 三十 也、元光、古云 九三九八四六六女 〇九五九三六 九 入七二〇〇八一 年十二月調 九、八九、七九日 四、大八二 一一三三三 六九七〇二三 一九八八七九

〇三五三三六二

四六〇一九三〇

-00五0四0 -00EO八-

大000000

五四

屬防補助費助費

基公項項路前項項項項項

二一肽款第第數高第第第第

=-

三一二二 五二八 八二 六二 六二 六二〇〇二二〇五二七五八 〇七七〇〇五八五〇五五五五六八〇〇

雜神本債 稅 支 計 費 郡村及

0

第第第第

十十十九

無器積

金

第第第 女育中龍全永小柁柁費費費常需雜給費部 子英野門校原島城城 時用 營所戶營地稅 業得別業價附稅割割割 小學校費 學校費 學校費 學校費 學校費 學校費 學校費 學校費 加附 割加

〇〇六七

經常費

合豫

二〇九〇五一一八六一六 〇一六九八五五七七五八一八〇六七六九二一 八〇三二一三五七九一二七七〇二〇四〇〇〇 一〇六〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

出 一班 (第二)

城男子小學校狀況

多力 能の其 他ラ表彰セン 同志相謀リ有 分ラ変 ノ義指ラ蘇リおガ多年 スラ 生等会批選牒ラ祈 が満足ス 遊願り ノ人ト ハ其忠ラ ハ其宗ラ諒セヨ君天 云フ ~ ÷ カ是 ラ以 美

(月三日

八幡に、 を悟り とに校外教授を零行した。高 を試みた、 三拾有餘の 地理自然の現象を観察せしめたが、 出 病浄將た優美に からずの小春日和、 つ覧く -陶器製造場に其方法を問ひ、尋二は西別府郊野に な目的と網密な方法とにより 彼等が 開かれたろう。 古蹟を探り 健見は、法る十 14 小なさい 親灸しては の實況を窺い 天空は青々と高く澄み、 我國建國 活氣に満 城小學校職員及有志総代 -一月廿二日櫻島登岳 真に字 得たは勿論、 の遠さを知り、替一は小 一は高屋山陵に琴三四は てる當校八百の見量は 12 7 中にも高三四の百 宙の宏大と美妙と 周到なる注意のも 12 寒か 山の雄大、 0 の壯學 らす暑

蛇城 男子部と分立せしは、 去る州

を朗讀 起者は去る十一月三日天長節の佳辰をト て殿かに表彰式を擧け、發起人総代原田氏は左 ふの つて壹百拾參圓參拾錢貳厘の多さに達した、 八川舎拾 氏を知るもの何れる深く氏に同情を寄せ、其 で、義捐金募集の企ある由は、前號既に記載した 務に勉励した其勞を慰め、 これを右金間に添へ 24 80 110 銀行に預入れたりで、内舎拾五四貮原を割さて賃債を返却せしめ、 中馬市兵衛翁が常校使丁 て全氏に贈呈 功を彰はし の知詞 校に於 金格 て發 38

台テー日モ職ラ献レタルコトナク終始一日 務ニッキ日暮レテ務ラ終へテ飼り致々動メ 様ナラズ然レトモ何 ハ各其能力志望ニヨリテ職ラ選ムラ以子其職ト 々職発ラ道と名利二雄ル 能ク己レ 一年四月職ラ乾城小 子其階級ノ如何ラ問ハズ成功ニモ失敗ニモ勝ツモ將人ノ水分ニシテ亦實ニ其美徳ナリブラト--ノ語ニ日 ラ知り分ラ辨へ職ニ忠實ナル 學校小使ニ泰シテョ 年四月ラ以テ ノ時君 職二從事スルモ ノ人ト云フベシ世風 盗稀二見ル所ナ テ修マ 年年六 ノモ其職二忠實ナ ŋ ノ知グ提二出デ 遊三 スル総種 ス君ノ如

(五十三)

-

是調

小堤防費

四七一一〇〇五五

一五五五〇〇〇〇

大0000000

金融病院費

無事歸校したといふ O 棺城女子小學校狀況

7

初めは同居異經濟と云ふべる

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

萬余間にして、 地を買入れて、 以て、凡、移轉の事を終へり、爾來年を関すると五年成を告げしは、實に卅六年の夏にして、其九月一日をに隣りて、拾坪の一棟を置けり、抑も之れが全部の落 含は総て平屋 を初め、男女総 総作法の数室あり、 の數を加ふれは、尋二四七名、高一五八名を出せ 操(宮崎)濱田ラ なり、 職員の移動 川邊已之助、 得たるは、 て四五名、 之を九學級に編削せり。本年卒業のもの、時常科に 生徒總數は尋常科二六九名。高等科一九二名にして 即ち男子校と、郡役所との西 校長室あり、 而して不年、應見島縣立高等女學校に、 翌年に至り元お子様屋敷 高等科に於て三四名、今これに分立以來 又少さにあらず、現下校長上野喜之助氏 建とし分れ 僅に四名なりし 校舎を 日子を費やせし ル一魔島市永田アサ、の諸氏なりとす 小濱秀幅、 て拾名、別府茂造(小根占)鈴木正次郎 小使室の如きは別に、 教員室あり、 て四棟となれ 濱田直一、 こと殆 書籍標本室あり 5 法元チカ んだーケ 数員室 内 教室 大凡 -の後 入學 し計 111 -

校は訓育の一法として、毎日始業式なるものを學ぐ

、こは始業前五分間位の間に、全生徒を検底に集め、 ・別総するものとせり。又高等四學年生を、日に二名 ・別総するものとせり。又高等四學年生を、日に二名 ・別総するものとせり。又高等四學年生を、日に二名 ・別総するものとせり。又高等四學年生を、日に二名 ・別総するものとせり。又高等四學年生を、日に二名 ・別総するものとせり。又高等四學年生を、日に二名 ・別総するものとせり。又高等四學年生を、日に二名 ・別総言に從はしめ、女子としての作法實習をなさし か居れり。

あれて、 いいい し夫れ 、補營校生とに分擔せしめて、権付け手入れ等をなさ校庭には花園、大凡六拾坪を設け、高等科の各學級と なる情 蝶來りて、 に本枝生徒の作文を採録 今や霜枯の、吹きすさなるがらしに、此處をも 春風駘蕩として、草喜び花笑ふの季節に至らば 閑寂の様、 操は、自然に此の間に養はる、 舞ひ、鳥訪づれて囀る等、兒童の優美高 いとで新春の趣に乏しといへを若 すっ ならん。 序に

そのけしきないで美しき 東のかたな打跳むれば 織玉也、高く壁やて、うすと風に 線の波をだとよはし、秋は見渡す限り、智こがれの色ま化して、型性の茂り、後の方に出づれば、目もはるの団の面ありて、夏は吹き来る、桑生の茂り、後の方に出づれば、目もはるの団の面ありて、夏は吹き来る、桑生の茂り、後の方に出づれば、目もはるの団の面ありて、夏は吹き来る。 楽生の前を過ぎ、道を馬手により、竹藪にて壺なほ小暗き細道を通り、

に絶わす。

を表現は、難父母及班上か始め、緑か合せて、名なり、段をなりはひこし おのれた妹とは、日ヶ県の窓に進ふなり、父君は鬼敢なくも、今か去るやとせの水無月の末つカ 無情の場に請はれて 締らぬ族 赴き給ひねっとせの水無月の末つカ 無情の場に請はれて 締らぬ族 赴き給ひねっとせの水無月の末つカ 無情の場に請はれて 締らぬ族 赴き給ひねった 情に与めく入途の豊けき鹿面のながめ うもいいならん。

「一、将京秋又冬と見飽かぬ景色 さては 美しき花を眺めつし、復智のかたはら 情ふかき母君より、歴史上の話を聞き、或は手修しつし 常に春のかにはら 情ふかき母君より、歴史上の話を聞き、或は手修しつし 常に春のかにはら 情ふかき母君より、歴史上の話を聞き、或は手修しつし 常に春のかにはら 情ふかき母君より、歴史上の話を聞き、或は手修しつし 常に春のかになる 情ふかき母君より、歴史上の話を聞き、或は手修しつし 常に春のかて、おなれり、後ではおいて、後に春のかには しょうけいないになん。

# ●女子實業補習學校狀况

各二時間づく、課外に家政科、見量教育法、英語の三名一時間づく、課外に家政科、見量教育法、英語の三なが非元化とする者に、簡易なる方法により、共職業に要する、智識技能を授くると同時に、普通教育の補管をなさしむるにあり。而して其教科目は、修身國語等をなさしむるにあり。而して其教科目は、修身國語等をなさしむるにあり。而して其教科目は、修身國語等をなさしむるにあり。而して其教科目は、修身國語等をなさしむるにあり。而して其教科目は、修身國語等をなさしむるにあり。而して其教科目は、修身國語等をなさしむるにあり。而して其教科目は、修身國語等をなさしむるにあり、一週

任教員は、間世田チュ(旧布施)伊藤モトの南氏なり。學級に編制せり。生徒總數は六六名にじて、之れが専科を教授し居れり。其學年を二ケ年とし、全生徒を二

### @ 招观祭

し下記五 委員に指定し、委員は諸般の準備に着手したるが、式 是より先き祭典の事决定するや、村會議員及村吏員を されたり、 及一般席とし、左側を遺族席とし、遺族席の後 場には天幕を打廻し兩側に席を設け、右側を出軍者席 低報 可を得たるを以て、愈十一月十日を以て合肥祭を執 乱以來の殆國者を、當官祭招魂社へ合祀の件、其筋 十の生花を装飾し の如 拾武名の英魂を配れり、今其紙况を記 く我加治木村に於ては、村内に於ける佐賀 て光景を添ふる な必遺憾 なく 方には せんつ の認 行

もなく、 簽二級又三發、爆然として空中 此日空は秋天の名残なく 魂祭を行 になり から引き立ちね、定刻前 祭典あ 出軍者、 れば先つ神殿の東側に設 . 次に成長役戦死者の 其生存者総代竹下貞永氏 一般参拝者引きも切らず、軈 より参詣する者遺族は日ふ迄 晴れ渡り、 に凝さては、人 四十 けむる祭壇 早朝合圖 年祭に移 27> に於て鎮 -0 0 3 ~ 十胡 氣自

全廿九年七月三日豪中縣埔里社戦闘ニ於ラ戦死

者等各設けの席に着し、弦に合配の祭典は開始され、 官伶人順次に着床し、 低然たる 者ありき、卒はつて 白髪の戦友諸氏今昔の成 午後一時を報するや祭主瀬川大教正 島津男代理、村長、 豊飯の為休憩 へやらで轉だ 遺族

下神

れたり、 機能にするだに勇ましく以て、忠魂を慰するに足れ夫より中學生對警官有志の撃劔奉納あり、健闘奮撃 式は終りね、 祭典終了 の後遺族諸氏へは、 神酒並に菓子を分配 0 3 5

宴會、午後三時より 死者の功績を偲い 家の幸福繁榮を祈 物に次ぎて、 し宴會の催 成辰丁丑の往事を追ふて世事の襲遷を今更の如く あり、 新納大佐の首唱 出席者 れかい て轉た懐舊の念に耐へさるあり、 軍神社庭に於て遺族諸氏を賓客と 宴漸く進み、 主客共に魯百余名、村長の挟 12 て一同杯を暴け遺族諸 談所々 に湧き、

し、砲隊に越後に達し、銃隊は東都に達す、既にして銃隊は沿道の

たるは する 基本金として四拾五圓五拾錢の寄納あうしど 夕まぐれ、物の哀を催す頃なら 失あり の寄納多か かす 斯して威奥尽し 或は游韓の當時を懐 に社頭 りしか 、遺族諸氏より W) いら るい かを照し、 期なく 因みに各方 -肉の嘆を發 世は秋 同散省 より供 12 祭典 0) L

戌辰の役職死者四十年祭に於て職友総代竹下貞永氏む 朝龍二たる祭文

郷軍人の祭文朗讀あり、朗讀

の際は祭場恰も水を打た

る如く、諸士の功動を追懐し座ろ版に禁へさりし、次

に祭主玉串を捧て拜、

一同の邦あつ、

あつて神饌を撤し壯嚴なる

島津男代、遺族順次に職

次に軍人、

先の奏樂の裡に神官の供物あり、綾て祭主の祝嗣及在

東北諸道の賊兵追討の命が奉し、砲銃前後東北和別れて而して航 戊辰の役我郷殉職諸君の職を祭る、伏し、惟るに 悦はす、相率るて脱走す、東北の諸溶亦乙れに聯合し勢復た織な 出させ玉ひ、東軍江戸城を開くに及ひ、徳川氏の臣后多くは之々 悉く帰殿す、幕軍乃ち海に航して東に奔る、是に於て征東の師を 途に撃て之を卻く、錦紋の向い所風靡せさるなく、觀察する者亦 心を包蔵する小虚り際長土三番の兵をして其衝路を扼せしめい 道より進み路に京都に入らんこす、是より先き 戊辰の正月會桑二落を先鋒さし、凡そ年兵参萬人、伏見鳥羽の山 臓が辞するや、幕僚不湿の徒頗る憤慨危疑する所あり、明治元年 践祚し玉ひし明治初年の冬十月徳川氏政権を奉還し、韓て将軍 り、同年八月我が郷大砲一坐、小鉄一隊、其具合せて百五拾六人、 明治四十年十一月十日、恭く清酌時羞.與女具 朝廷深く其禍 天皇

魂を祀らる、嗚呼往時を回顧すれば已に四十年の遠きに ふこご多かりき。明治二年官本社を弦に設け以て永く諸君の忠 多なり。朝廷深く其死傷を哀恤し厚く戦士を慰勞し玉ひ物を賜 ご謂はさる可んや。失れ新の役や我が除の奮戰死傷せし者亦許 英く。僅かに旬月を經て而して園園平定に歸す。豈 平ひての面して各里都に凱旋せりの盖天兵の向ふ所克く捷たさる は越後鼠ケ關等に於て激戦し。又箱舘に據る脱兵を伐ち事全く 験を破り台域攻撃の軍に加はり。遂に城下の盟を成さしめ。砲隊 皇成の隆盛 及小。其 

> らす。本日間友相負し聊か祭事を祭む。尚くは饗けよ に際昌に赴きの上下歌喜の光景を見るに常りの諸君ご此の悦を分 へし。今や戦友も年老いて已に逝き生存する者儀かに れこも諸君か敏像身を致すの忠動は永く竹指に避れて朽ちさる つ能はさるを僕ひ悲哀交も交も至り感慨含ふ可らさるな 間日清の快戦ありの征懿の大捷ありの島威夷邦に發輝しの 明治四十年十一月十日 其 50 國運日 华上

戊辰之役出軍生存者総代 竹 F 貞 水

明治十 明治十 節頭魚 全廿八年二月七日清國金州二 明治十年三月十二 年四月十四日熊木縣盆城郡飯田 年五月三日本縣出水郡出水二 ヲ年 五月日十 七月 廿東一七京日 日 二中 病日院肥 B 於ラ負 熊本縣山鹿郡 本 二前 陂 统干 傷鬪 軍職備病院二 ラ栗 於テ戦死 二族因シラ死亡 レ江 全見年並 城村 於ラ戦死 二於ラ 山 (公務基因) 於テ 戰 日逝 戰死 死擊 死 亡

全第二十 第二十除 第二十除 第二十除 第二十除 第二十除 東二族 全第四大隊 除師團 第三中隊的第三大 第守 三聯隊 司 稻 重兵第六 第三中 合 第二中於 卒近衢步兵一等 等率輜重兵二 查视局二年巡 陸軍步兵少尉 陸軍 步兵 四等巡查 通器官 A 伍長 扇 木寫喜左衛門 縣的 原口 湯田 相良 山崎 大石正次郎 藤崎休太夫 與吉 成脩 角次 健

二豫上豫卒陸卒陸

松尾

板並· 富歐

堀川

文年七月廿三日臺灣海山口ニ於テ間歌熱ニ罹ッ全年七月廿三日臺灣海南衛成病院ニ於テ病死(公務基因)
全年八月一日臺灣湖南衛成病院ニ於テ病死(公務基因)
全年八月十四日清國旅順口病院ニ於テ病死(公務基因)
全年八月十四日清國旅順口ニ於テ病死(公務基因)
全年八月十四日清國旅順口ニ於テ病死(公務基因)
全年八月十四日清國旅順口ニ於テ病死(公称基因)
全州七年五月十五日諸國旅順口ニ於テ病死(公称基因)
全州七年五月三日旅順口沖上於テ病死(公称基因)
全州七年五月三日諸國旅順口ニ於テ病死(公称基因)
全州七年五月三日諸國旅順口ニ於テ病死(公称基因)
全州七年五月三日諸國旅順口沖上於ティッ島之一日第2日諸國旅順口附塞ノ際戰死
右
右
全
右
全
右
全 病死(公務基因) (公務基因)

全聯幕濟 佐

弟師 世

一團遊 保

中步

二第號中廿

豫 陸兵海 海

備軍曹軍軍

四

左衛門

上四

等機關

中原

仝三等看護長

川元

第隊兵

除·三

步兵伍

**黑** 土 流 仲

全 全全全全全全全全全全 全線 第第 陽 右右右右 初 签 著 第 十六 一六 廿 一師 中師 『 一師 中間 除闇 炎 職 是 職 

日高矢三次 日高 原職太郎 西原職太郎 西原職太郎 市村 吉殿 上枝宗太郎 遠矢 落合 金成四象

第全第第聯第隊近 三野 中戰 中戰中師第師二師 隊砲隊圍三團中團 隊砲 兵 第中步隊步 第 廿隊兵 兵 督 六 三 第 第 十 一 除除三

仝仝仝仝艦 艦號

安留治兵衛 喜助

臨田

安千代

和美谷竹田坂山下

道岩

船全 中三死全 中年 傳十 年 二二 馬八 十 全年三月七日清國漢城堡攻擊 年十二月 ラ十 死日 七十 少八 B 為日海對 清國盛京省遼陽兵站 大 連 中馬 三陸落 IJ リ門司 フト於 少灣 戦死死死 9= ~ 航 溺於 (公務基因) 第死(公務基因) (公務基因) (公務基因)

全死全年 全年 全月 年四月 火年 十二月 卜月 省三後日 # 仝 仝 シナ 百後満州屯舎病院ニ於ラ灰二日衛兵勤務中急性脇膜炎 丁七日熊本豫備病院ニ於ラ 日清國山東省英禹 日清國毛家屯戰鬪二於 9-派日遺佐 B 中世 全保 國新 煜港 屯 含 發碇 戰 ノ泊 ラ膜死炎 為軍 は経三笠號罹災ニ付 ラ病死一公務基 二於ラ戰死 ラ重傷ヲ負 元(公務基因) 於ラ 「公務基因 t 翌 H

H 良郡私立敢育行は、去る七二月 今其概況を左に記さん。 秋季總會を當村柁城女子尋高 の小學校に於て開會

土)當日開會に先ちて會員の亦集す

仝 仝二近第第 소소 親第 第十四師團 一中隊十二甲隊第一中隊第二甲隊第二甲隊 隊六師 歌圖 第一中隊 第 第十一中隊 一中 衛生除 輻 中 中 重 監 等軍二等水兵 聯第陸 豫備步兵一 海軍二等水 陸軍步兵一等卒 陸軍步兵少 **豫備步兵伍** 除六軍 步師步 步 兵二等 等 本三等 本三等 兵伍 兵一等卒 等卒 尉 灰 较 下水流 萩原 三坂 安樂 野添 遊島 園 永 市兵衛 木孟 銀 其右衙門 膝一 虎助 與吉 宮熊 仁助 金人 四 RS 吉

於て、 てろありたり。 員會を思さしが、皆緊要なる問題につき協議を凝す 單に新任の挨拶を兼ねて開倉を告げ、これより別席 38 の二百 尋常高の共一、三學年及農科裁縫科の各担任教 二十三名、午前九時半會長大山 午后は更に一時三十分より代議員及 綱任氏は、簡 31

事の庶務報告ありて午后四時閉會。 中摩凉吉氏の有益なる縣外學事观察談 黒川澄江氏の、 を以て當選したり。これより應見島女子典業學校長 -0 の八氏、 を行 松下雅、 益なる縣外學事观察談、及市來本會理裁縫教授に關する適切なる講話、會員 しかっ 副會長には枝次正春氏何れ 黑江透、中摩凉吉、 には厚地 政 Ŀ -も大多 野客之 田定

ろなり、然るに交通の利便、風俗の純井なる 郡が女子教育地として、最も適當せるを以て 設するは焦眉の急務にして、 報告了るや。 六名、前日の敦興會の經過につきて各委員の詳細 縣女子中等教育機關の足らざる今日、高等女學校を増 後休舍 女學校を始良郡地方に建設せられんことを其筋 するの件してれなり。依りて会長はてれを討議 第二日(十五日、日)午前九時半開會、出 全哲一致を以て直ちに可決し、上野喜之助、 城造熊の三氏を陳情書の起草委員に選 休憩に先ちて一議題は提出され 縣民の 一般に認むるとこ 席 會員百 一颗立高 たり、 -共に本 12 定し 附せ に建 なる十

午后は來賓の講話を請ひしが、上野縣教育合理事は 天與の好位置なるに 鑑み會員諸氏が -層 0

> 審脳あらんで、 ・ こうを設上必要なる注意を與ふるなど、 合員の ・ 高目巳の所信と疑問とにつきて教育等の 6 年 ・ 会員の を終へ全く閉會を告けたり へ全く閉會を告けたりと v

# ●錦江義會發會式

及平原警察署長等の脱演 納時亮氏起ちて開會の辮を逃べ、併せて同會創 加治木驛長を始 は、 為より今 式を當町有爲含に於て舉行 本村に於て錦江義會なる有志图 來賓竹下稅務、 T 3 展表樹氏の詳細なる會計報告、上村當村長の祝調 藤友樹氏の詳細なる會計報告、上村當村長の祝調 の今日に至る經過を細大洩さす熱心に航途し、次 の氏起ちて開會の鮮を遠べ、併せて同會創立の次 しを以て 當地花道の宗匠奥氏の指導に成れる楚々 宴會に移り、主客皆な、 第 を眺めて 一號 に記する所ありしが、同會 、去る十一月三日 随意江 8 平原警察、 招待者會員共百余名 酒 着を尽し 南 5 せら 會場 て式を終へ H 天長の住辰をト 座奥に 同會 専賣の各 の組 0 ば午後 战朱其 音音 食卓を飾り . -3 點燈時に 先づ合 署 n 元の管長新 後會式 Ξ る數多 時に , 12 至 て同

て聖書無糧並 0 錦江美會創立主意 主意並に規 业に規約を左に掲けてしたるは午後八時過, 約を左 同會 n W の萬歳を三唱 聊る 乱 の体 . なる LEN

教を極

金融米に則り軍人で我郷里の振興を希園する比々 のは勿論なれ必ら有志者ありて之を補翼せずんば其 のは勿論なれ必ら有志者ありて之を補翼せずんば其 があ教育に衛生に農に商に工に將た風俗に百事其模 始め教育に衛生に農に商に工に將た風俗に百事其模 がある。 がある。 がある。 のは、事ら村吏村會に須 **尚之にも警省せす傍観座視する時は村内の遺利も撃へさる所なり而も肥薩鐵道を通ら目睫の間に迫れり投郷里を顧るに来だ公益事業の奥らさるは遺憾に堪皆然らさるはなし此競爭劇甚の活世界に介在し獨り** て 简. 21 カ> するは刻下 て一の交際機關を造 **登**愛村者 21 の急務 歸し悔を他日に遺すや火を睹る **を供に若干の私財を投し政黨** 之を獣 12 下人民の幸福を増 過して可なら らすや一郷の 5 智力を蒐め公共 發展 搥 せし 宗教以 自国國威

> と欲す宜 臂の を希 勞を取ら 江義會 望すと 爾云 n 0 忽に 進諸村又は列國に後れさらんこと忽にす可らざるに鑑み蹶起入會一項目を附し同郷諸賢の養成を仰ん 家 立 の沮 の必要を成し 盛衰榮枯に大關係を 國 たる所以 因 なり左 有する

發起者 新 納 時亮謹

明治四十

年

一月

毎各し6年し幹し6公加本何本 月方 長毎内事で長共治日人會 不に四若二一の木員を錦丸を一名である。本の本はは一名では、一名では、一名の本はは一名の本は、一名の本は、一名の本は、一名の本のない。 事す互し選會を遠との名中へ選付すの以を旨趣得 を長べ事で主と旨す 以をし移目眼しに 5 を的と思赞 七稲 \_ 総とし君成 名丘 '含佐 理す農愛す 計し 工圏る す 選 をて 商の者 但 氣食 2 を精を 総 NO 災心以際とて 館 る整 .0 0 事理 し以組 公 但を 理 選出 圏で織 一指 家我す K

務但月方 战二一限 幹十回に 事日づ委にをし員 委定総若 任日曾干 すとを名 とすりを 多数 雞 36 粉會 を研の 糠 0 事故は 究指 す名 38 23 大 小 に拘

にき多 る數 者决 はを 會で 別を定め合合を約 貴寶 三行す の二以 Ŀ

故本語で會注倉事べ時は木 常で可に 本但分土致限 財席の地盤ら産場内を集す にに公撰事時 為要席擇 るす或し べるは相 9階個當 財費人の 源をの食. 探支室場 究佛をを新にふ借新 深ベ用築

べ盆 28 若な しる 至急を 為若 LF 20 は非 要柄を 充本 る金 る按 事奠 時出 はし 3 臨議 × 時題 カン 會をし

常死家にべ金と但ヶ但に員但に自求総員意員務し機必會要但総 の者危補し溜 鈉 敷の急た 助遺のぎ但者 を族場る共は 興に合體月萱 太陽に数中間る難ははにに 金て入出止定のすは酸合金退に酸る 事者應四納付 返金者の會依金に 附をは現せるをは若 ああ分拾金日 るの五す少 るる機高と ベ時義入る四 しは務を時毛 其を以はの を返す 非尽て此割 子除護附る 情す計限を 調事算に以 没する 33 すかて 収べ妨事は べら利 すしけ E しず子 3 15 n を倒 36 0

> に数に 依么罹 り掛り 康蝕 0 恐れ 12 幾 分 D の義捐 3

る人は内部 を許す事事 を許す事事 一し 方一 に成 偏以 し村 た内 る有 宗志 旨者

主上食就 島宴に賀 津倉し會 家のての に摸杯外 對範盤一 しを獲席 91 同すは設 人 連事勿け を間は 論客戰計 名を以 す名 . 献 年賀 酮 等 配

本金出 納規

を基る基主不合す依各 公本時本任得に 時本任得に り會 事の更量私事で一引の し行立しす総の分定五定 **残又繼たり合と前め投**部は積る妨日す納毎銭 は個す時けに す月をる二以 各人るはな験 自に串酸し金 当十七 の預わ金 妨日一 L 機けるを けに株 利其ベ中 战 な出と L此 # く金し 1 屬子 利す各 3 尚不 すニ 子る自 者は會計 る分 はもの 元の 足 其の望 3 割とに

00

越但

别內

を部

以汉

で處理

する

るなは

を型月

0

調

全者村徒上數出數 立 2 加 田け 七四 第一學年 木中學校本村出身生徒詞(四十年十二 3 23 人學志願者及入學者調 銀三舉年 第三舉年 二四 九九 て総ケ業 EU を為業 一九 1三 二 八五 て事務 すより を製する 衛口學年 然此形年 即多 したる時 充分のでしたる時 充分の 時は質数額を

出三者志明 九大 卅 七年四月 九四四八六 學 30°× 百比 者 者 者 者 音 面 五 年 四 月 司 一入 一〇 七〇 七〇 光 图、八 四元 三三百〇七、比 五. 四五 者學四 先 美、四 元 高一七 百比 月

生二名、 名、高等農林學校卒業生一名、仝上在學生二名、農科帝國大學生三名、高等學校生四名、高等師範學校生一 陸軍將校三名、陸軍見習 陸軍將校三名、陸軍見習獸醫官一名、官學校生二名、陸軍經理學校生一名、 大學質科在一名、高等工業學校卒業生二名、全上在學 東京遊學三名、米定四名、死亡一名、 三名、仝上在學生三名、私立高等專門學校生一名、 因に縣立加治木中學校は舊殿中本館一棟(二百二十坪 更七名、實業四名、激員八名、渡米八名、 宿舍の移轉及運動場 の建築を竣へ四十一年度に於て、校舎二棟 本村出身卒業生の状况左の如 醫學專門學校生四名、海軍兵學校生一名、 高等工藝學校卒業生一名、高等商業學校生六 層蘭整理講習食 五〇 めたり の取り漬けをなすの数定なりと、 一月上 第五回第六回 旬 (四十年十二月調) 私立大學卒業生 海軍將校一名、 陸上運動會を催 四〇三〇七 兵役 の増築、寄 陸軍士 一名 宫

計

月

調)

農會の主催にかきる同會は、千一月二十二日より

なり 開後郡内を 爾後郡内を益するの多大ならんてと信上て疑はざる処職線熱心の指導の下に精々講習せし結果、成績佳良、 すや、講師は斯道に堪能な⇒吉永信子にして、全女が し、我村よりは一名譯習生なしとは、情なき次第なら 生二十二名 0 12 中、肝臓郡より二名の加入者あるに反 加治木鄉友會事 2% に開催せり

當村向江町 より寄附せり、實に殊勝の行為と云ふへし、自家製造の霧島丸と即明丹とを、各十袋づら村向江町岡元直吉氏は小島校修學旅行のある 岡元直等 った 数年に

●馬喰雑報附山下氏の光榮

當局亦 養に注意するを以て、 郎氏産馬の合長として多年斯界の為め の近來産馬業に着目するもの、 産馬業の前途は多望にして、該業刻下の勃 時的投機的性質を有するものにあらざれば、本村民間業の前途は多望にして、該業刻下の勃興は決して 推得を蒙る べき現象なるが、本村の産馬界に於ては、神村 當業者は勿論斯業の改善に努め、 其發達を希望し 12 加治本馬は此点に於て同菜者間 3 職業費自中産馬業の項目を 漸く多さに至れるは慶 12 0 馬匹の管理飼 尽瘁 し、村 竹五

書紀時代の上古既に其事實を見るなり、(他月)の

75

0

英傑のみ

なら

すっ

33,

薩摩馬の名は、古來全國に嘖々とし に昨春 て一等賞を勝ち得たるは、 ものにあらず、一般の成蹟は明か 生 をして此処にも新蔵北の現はれしを驚嘆せしめん 頭を有する りしは惜むべしと難ざも、次して全体に於て退步 曾木氏の馬四等に入撰し、之を例年に比し多少遜色あ 賜約百四十頭、審査の結果、牡仔馬一等馬庭仁助 を催し、 資格を有する事 い過程にある本村産馬界に於ては、 なるが爲なるべしといへ必も、 而して本郡仔馬品評會に於て前記馬庭氏の馬三等、 牝仔馬一等前畑甚次郎(西別府)仝二等不明なりさ 全二等會木造五郎(反土)、全二等向江直助(酉別 深洲産牝馬る三頭の小蒜屬を提び、 下山助氏の持馬錦號が 昨秋又春日河原に於て之を開き、集まれる仔 質の反影にあらざるなさか、新く きは、盖し之祭 か其光榮を紹介 窓に本村産馬界の -亦本村の産馬地として 0 本縣馬匹共進會に に其進歩を示し、 て淵原強う、 每秋村仔馬品評會 曲 せん。 12 明治 級め の伯 せる 8 反反 發展 す

近時一般の逍境を見るの機運に向へるが故、 花を .て、表面に一等賞の篆字を希臘式神馬二匹双方より抱 馬政局は馬政官三浦清吉氏を簡派 日より廿三日遊鹿兒島市築港埋立地に於て聞か 四日證品授與式を行へり。 與し、 撰に入りしもの、實に本村西別府菖蒲谷の山下山助氏 ありて 等賞として馬政長官は全氏に金牌及び金巻百聞を授 三十九年八月十一日現身長四尺七寸五分)なりき、 持馬錦號(明治三十九年三月十五日生、鹿毛ノ小星 政局の賞牌は、經二寸、 飾らんとじて、第一回馬匹其逃會は昨秋十一月廿 領重なる審査の結果、良馬湾々た 大坂朝日新聞社、牧畜協可等より又金牌 本縣產品界に於ける空前の名聲を博せり。 の奨勵と相待ちて斯 厚三分の圓形の黄金製に 斯の如き歴史を有する 面々たる当第一等の榮 業に奮闘せし結果、 錦上更に

-

と噂せるも理りにて、實に燦然たる大金牌を胸間に 佐に馬神とし し、秋風に嘶ける様は、風姿颯爽として馬族の英雄と するものあらざるなきかっ せしものなりしと、西別府と偉馬、又多少の因縁の 、開設らく往者義弘公の騎馬際実栗毛、帖 て祀られしもの之れならしは、西別府に産

選英山下氏が斯の如き光榮を擔へるは、决 議の程、決然六百の巨金を投して横濱の外商より洋種 米だ舊套を墨守せる時代に於て、早くも之が改良に着 結果にあらすして、氏が世の毀譽を願み亨産の界 手せるを以てなり、氏は去る卅三年保守的産馬家の誘 號は、 にして、 ラブ種の良牝馬を得たるもの、即ち今次の名馬の母馬 サラブレット種牝馬を購入し、玆に改良の發程に上り サラブレット して此子馬ありと云ふへきか、所謂馬の動章を得し錦 の成功に對し、多大 如き明察、確信、奮勵の結果、這般の光榮を博せる氏 之を九州牧場の種馬っエドルに配して、アングロア 該母馬と牧場の種馬アルビネンとの間に産れ 同しく思政局より褒狀を受けたり、此親馬に 種に属するものなりと云ふ、吾人は斯の 敬意を以て之を脱せざるを得さ して の事

の寄贈

して、之れが推奨に努めらるとは、吾人の多謝して措饗宴を開かれたり、男得が常に我鄉各種の事業に注目 30:00 之れ 村產馬組合於神村竹五郎氏共に之を自邸に招ぎ 処也。 に臨み、更に同男は山下氏の光榮を脱し、 於て盛宴を催し、鹿兒島にては島津男も招が は受賞披露の為め、鹿児島 新名忠右衛門両氏に對し、脱杯を擧げんが爲 の競馬會に一着を占めし當村馬匹の持主東 の玉川 屋及び 併せ ~

馬政局と銘せる文字を閣繞せり、之を紫白の殺を以て

し、裏面は苜蓿の唐草模様せしが、年月と

懸け得らると

へて山下氏の馬は金鵄動章を授か

の装置をなして顔る美觀を呈せし

### ●馬耕競型會

狀授與式あり、受賞者十五名一二等受領者左の如し なりつ み盛會に趣きつしあるは農事改良上大に喜ぶべきこと 耕競型會の催あり出頭馬敷六十、年々馬匹增し技術進 去る十一月十四日當反土字総門に於て、第六回本村馬 始まりは午前九時にして午後五時に終り底に賞

等 田丸七右衛門 反土

● 後 米共總會受賞者 向江市右衛門 反土

開催の處、 鹿兒島市奥業館内に於て、 àir. 出品 点総数は五百五 第一回本縣後米共進會 点の多数に及び

> る名譽版を干明知事より 他の一人は國分村民なれば、部よりすべて之を出した 誠に名譽の至りなり、而して一等受賞者は二名にして るに付常郡農會長大山綱任氏は、國本の二字を現はせ 橋七郎氏は一等賞(拾五間)を受領せられたりと云ふ、 褒賞授奥式の舉行ありしが、本村木田鎮田 當村よりの三点の出 备 あり、去る十五日右 授與され たりと云 内に在 曾場 る土

# ●天長節遙賀式

れりつ 校に於て官民邀賀式奉行あり、同校生徒職員の外集ま芽出度天長の佳辰に當り、午前九時より柁城男子小學 れるもの百五 十余名恭しく資祚無窮聖書萬歳を脱し奉

脱宴會、 を搖かす、之より宴に移り異を極めて散會せり、 つ村長起て皇帝の萬蔵を三唱し一同之にに和して聲堂 催あり、會者二百余名喜色面に満ち瑞氣堂に溢る 當鄉 友會議事堂に於て午前十時佳 節脱宴會の

## ●入營者送別會

會、上村々兵事前長の挨拶に次で大山郡兵事命長、 在鄉軍 篇、 一月十三日郷友會議事堂に於 村兵事曾主となり送別會を催むり、午後四時開 人會 0) 訓論的說辭 から て本年入營者三十 終っ て酒宴に移り 一名

て目的とし、

該會席に於ける禁酒い

踏材したりと云ふ、

●加治木青年商話會の成立

三氏主唱

を組織せり、聞く十數年前、它街實業者青年會なの狀況とに鑑みて、昨秋八月十五日、商話會なる民主唱の下に、社會の趨勢と、柁街の地位、及び校街有志青年は、佐藤査一、森山信三、森山藤次

犬田の南小學校を親察し何れに於ても大に得る所あり校へ出張し、同日は霧島へ會合宿泊、翌二十七日霧島

大に得る所

、常務學務委員長谷場唯二の三氏は東襲山小學分小學校へ、小鳥訓導中村與一郎、中野校長宮永原校長木鴻仁之助、龍門校長長濱三之丞の三

高潔の義務を負へる人の行を壯にす に五十名、嗚呼一朝有事

入營者氏名は左の如

廿三聯隊步

三三聯隊步兵

野

元丸村江山 山坂口村內留田川山江良田 太.名

八清正仲新吉歐武太金榮破俊清英 庄 太 次兵太之 兵之之 太 郎二郎衞郎助吉二衞助助市憲志吉鼎郎

廿三

犬犬小東日向久萬享梅瀬今桑 電童野木高江田谷保木口中橋

定市虎左龍誠休甚矢右英右常

衛 之衛 衛 之衛 衛 市 次治門助助繳助助門一門重

仝仝仝小仝仝仝仝仝西仝仝反

14

別府

灣守三

全全全反全全全全全全全的 全全全全全本 字 陸軍少佐原産郎氏なり。 設により、本縣内、伊佐、出水姶良郡は元宮崎聯隊區所管なり ろ何事に拘はらす廣 何事に拘はらす廣く視察

たり

聯隊

司令官

因に同

0 0

郡

と共

に同

八代 四

て極めて

必要

0 4

なるを

を利用

て、師範

今回は近村學

て参考

**战級製時計館** 諸氏の抱負の、那邊にあるを窺知するに足らん、吾が て、一大發展企闘するを、必すにありと云へば醫個條を質踐窮行し以て將來に於て當町商業 幸に斯界の為め健在なれ、因に商話會 騎兵として去る十一月入營の際、同 其の他種々の餞別品 れりと云

付 武 g 軍步兵大尉伊 雄氏

重當燭中 宮町の都 長井を城 池篤學の 田左げ人 以衛 ら現

此め 省

委員 牧清 虎 民は此程 專賣 屬 12 般 任 常地 せられ 專賣所語 當地

子にし ト く 野 重 電 氏 間文學士で 温波豪

代多嬢の本豆犬は南 

のの城幹は市げ

從來の悪弊を絕對に係

信用の

回會の趣意を紹介せんに、實業の發達 其の前途に對し、多大の希望を願せ

ものあり

勢の 留めざれば、吾が商界の事、依然奮智を墨守し

推移を知らず、恰然暗夜の摸索にも似たり、斯

商話會の成立せるは、総に時宜に適切

遂に龍頭蛇尾に踏し去りて、其

の影だに

T

加治木商界の指導者たらんことを期せ

間の退げ

を同化 を同化 を同化 を同化

丹训

八線

年に 事山

件り

狀者

を下附

里に於

ざる舊知人の消息を審ら

でに御

東に皆是れ委員諸君が油汗の余雫と御察し申上ぐる

候殊に含員動静の一欄は多年曾合の機を得

かにするの便有之更に深厚な

る與味を覺似申候要するに第二號は初輩に比し一般の

白來り候やに察せられ候是れ全く諸君多勢の

後翅

しどなる様な嫌は無之や通信欄は別に申分なく湯

にて抑州逸

史折角の御骨折り

で貴

い度く

6

なけ

於ける

頭より余り

舎氏の福州雑録次號以下大に見るべき者あらん林氏の

故下段より始められては如何雜纂欄も至極賛成菊廼 碧水氏遙々寄稿の勞威謝の至りに候詞藻欄は折角の

ら績柁功般指親滑本大文 る掛城勞文宿幸卅郡口鼻 省無ら海大近る昨病北 中本れ軍尉衞京秋死京 島能省縣 、か男に部郡以七書警士 6子對省親は八記祭と 、大 學 ざ小しよ學金年市署何 散 る學でり官七戰來在れ 中大省 官 臘共乘補 に校金金日拾役正勤も由長級百高間の一の東 る勤士第組生 39 孫 住 住 住 信 本 志 編 一 田 の六六仰長 り原治囲査を原館柳京 昇 林日聯ゼ井 交田間を市賞の市田に 4 豐踏隊付清 部定を賞氏與功來新於 干新鲜 B 命 代三上 图 萬子 十一日 はは大 本月より浪速銀行應見 去本の 岐桃治氏は昨夏來歸 は る月被 の十二月二十三日収助を與へられた 舊腫鄉

### 讀 者 0

Ż 殿 F 御通過の原は在郷軍人婦八會 の諸

ては創業日尚は浅く随分骨折りの事とは天から御察編輯委員各位筆視念を御健群素賀侠陳者本誌編輯に を搜せれ 上候得共唯御急考迄に遠慮なく本誌 しは 給は一號に比し余程鮮明にで且 資流機の輝出 の哀悼 に就 の解 評 L

少尉に任せ

次に論説欄は上下二段に分たす第一號に頗る氣の利きたる御手涯にで轉だ同情の

以て有終の美を逐げられ度切望に堪ねす候實言多罪然らしむる処傷ら感謝の外無之候冀くば各位御自愛を

# · WIOIN

0 本會 V) 金寄附者氏名錄

且の大なるかを唯々涙を以て感謝するの外更に表情の合掌九拜せしやを知ら京男信の御客捨は如何に恩深の 諸君余程目を廻された事を信する東宮殿下御行啓記事 には脱杯を揚げ島津家記事に於ては健度か卷を獲ふて 上に横溢する處頗る目出度し漫言欄に於ける墨庵居士 水難記事同情の外なく青雲舎員の旅行記青年の活氣紙 なさに苦しみ申候其他農事一班に蛇校の釈况に美事 て貰い度かつた同郷會の簽會式詳細を知り得て委員調票欄同様二三行の事でもあるまいから下段より列御健筆何時も乍ら威服〈折角御自愛を祈る雜報欄 金五圓 金五圓 金五明 金五面 金五则 金五圓 金七圓 金拾圓 金五四叁拾 五叫 Hi. Ti. 周山 秀平君 村田平一郎君 一郎君 一郎君 杉田 字都宮鉄一君 日野 佐藤平太 金平右衛 長二君 一人右衛 俊產君 金六明六 金五圓 金五圓 金五圓 金五圓 金山圓 金五圓 金立圓 金五圓 金五圓 金八田 金五 金拾圓 錢竹下仁右衛門君 後伊游丸藤藤方目 大稻垣 松田 落合 谷山初七郎君 政實實 英長新 近臣 二君君君君君 太 卷二君 重節君

金五圓

濱田 金彌君 人

金五圆 金五四

濱自

金五圓 金五圓

清助君君

金五四

金五四

額不足に付き該芳名は次號に掲載すべしる特志家の外多数の寄附者ありしる編輯

熊毛郡屋久島宮之浦小學校臺北樵臺街一丁目入九

清國貴州省貴陽府師範學堂 見島師範學校

河國泗川省成都皇城內區所屬郡佐多村小學校 學優勢

教師官範

(五十五)

教學 生 数節

Bobandam Station Cooma Msw 東京牛込市ヶ谷左內坂町一二、 銀行員前 貞太 陰 右 平 電 市 即

Australia 宮崎縣東白杵郡延阖稅務署東京本鄉龍閩町卅三長榮舘 日向國兒湯郡高鍋小林區署轉國平安北道京義線良策驛 干菜縣干菜町 專賣局東京第二製造所專賣局東京小石川日本女子大學 清國北京大學堂 屋久島小林區署 山口高等商業學校 長崎高等商業學校 後國舞鶴祭察署 字肚應見島支部 五聯除第九中除

政種君

喜三太、 正次郎、 二、長濱三之丞、園田平治、 川邊己之助、古江新藏、宮路助太郎の海口点記、正田武査、法元チカ の十七君

一金五錢 岡山 岩田熊太郎、 岡山秀助君 之助、伊丹親幸の十君 小濱秀助、濱田直一、岩崎堡 小濱秀助、濱田直一、岩崎堡 台本勇夫

治、曾木隆興、梅木太吉、山上貞武、壹岐志郯城、一金壹圓〇壹錢宛 川上吉之助、伊丹丈四郎、市來平一金壹圓五拾錢 樯木 角衡君一金壹圓五拾錢 樯木 角衡君

川上喜之丞君

市來操、梅木太右衞門 の拾君

會費は九日 **會費は九月分より徴收す** 會費未納の方は至急御納付を乞ふ ●在外雜誌講讀者住所氏名(申

竹下尚幹、上床新介、木原產二、入枝慶四郎、下津衛門、土橋新次郎、木佐木杉鎮、白尾產助、山崎秀衢門、土橋新次郎、木佐木杉鎮、白尾產助、山崎秀衢門、土橋新次郎、木佐木杉鎮、白尾產助、山崎秀大橋设宛 桑原静哉、法元一郎、本田源三、老山 佐世保市木場田町五五 江田鳥海軍兵學校 爲高等師範學校 丹坪田原 支 新 源 静 积 四 八 三 散 通

832Sanpablo Avo,Near 22nd Street.

稅務屬

伊集院稅務署

全

二太コ平人太治清門平平志彦二

學生

技師

道 監 選 接 手 所士

都宮田

町鹿兒島貯蓄銀

行

警視

教能

鹿兒島郵便局工務課 鹿兒島市小川町五、 東京市本鄉區第一高等學校教授兼 鹿兒島大林區署

谷松 川佐 平右衛門 初七郎

會則修正 たるものと設定することに決議せり、然れぞも従來の論様より、昨秋の總官に於て、加治本人は全然本會員に會員非會員の區別を、設定すべきものにあらずとの を以て組織し、會員相互の親睦と本村の繁榮を聞るを 趣旨とするものなれば、 則は、 個後を摘記すべし、 悉く本行員たるべき、権利を義務と有し、 、同時に二三の修正を加へたり、左に其の修此の決議は多少抵觸する個條あるを發見した 本台は元來加治本人及加治本に緣故ある者 荷も生を加治水に享けたる者 其の間

五銭ヲ熊出ス 二條及第十四條は全部剛除、仍りて舊會則第十 加ふれ者及第十六條ニ該當スル會異ニ限ル

三條を第十二條に、第十五條を第十三條に訂正、

B

告

修正、 ル者ハ住所姓名ヲ明記シ其旨本部へ届出ラヘシ」と第十二條(高條)を「雜誌を閱讀シ又ハ廢讀セントス n 者

附則に「雑誌に關スル件ハ商議員ノ決議ヲ經 第十六條(舊十)を「本會ニ金五圓以上寄附シ ハ特別會員トス」と修正、 ルヲ要

ス」との但書附加、 べきに由り氣寄を以て講讀者勤誘せられたし 雑誌閱讀の申込なる方には本號より發送を停止す

- 次號は四月十五日發刊に付原稿は三月十五日迄御 送附わりたし
- 記事編奏の爲め折角の御寄稿を次號廻しになさざ 拾捨省略せし個所多さは寄稿者に對し恐縮の至り るを得ざるのみならず本號掲載の分も編輯部にて 不感御諒察を乞ふ
- (注意)本誌は新年號に付六十ペーロの多さに達せしも 昨年十一月廿一日本誌第三號以下出版法に據り手 積省路の件を原内務大臣より許可せられたり、 ーッを以て定數とす。

新

(-) 「ろうだ

前まで

來ると、

\* ッ v. 寒い 酷な

冷える晩ね」

何しろもう歳の夜でするのね」

けて掛き屋 さ、男と女の摩で、男と女の摩で、男と女の摩が 大の聲で如恁話しながらやつて來た。雪女の聲で如恁話しながらやつて來た。雪女の聲で如恁話しながらやつて來た。雪女の聲で如恁話しながらやつて來た。雪

の家並が一寸斷れて、れ稽荷標からしい、寄添ふやうにして歩くのらしい、寄添ふやうにして歩くのでいる。 か祭ってあるた。 ある 小は、進るであ 更之人の雪い

男は、実力、けんなは男に非と他りは男に非と他り 何だ?、何を其麼に膽消るんは男に舞と他り付わた。 難を んだし W ~ 提灯を 持つ

た

下たり

をする。

柁 城 第 號 附 錄 小說

「真雪へて 質にろうね、 居るだろ」 つこれ晴衣を見せたら奈何麼に喜

なか知れ 15 2 て一盃飲らなくちや……」 - 0 01

「悪い」 「悪い」 「悪い」 「悪い」 「悪い」 「悪い」 「こさられ さらな 介意にも置けないし、貧乏世帯でもろれ相應に仕方はないちあありませんか、れ正月だといふ され て金佛のやうに ちあ やうに冷る切つちの変相にな 割りか 合はんね』 ったのに 緩。い 酒の戦力 になの - 4 盃は引き 間以に

8

w

1

何篇 3

6

n

観さど

て摸

織さ松も煙の清しい

0

8

の。何い生ま

0

色の

2)1=

し競響

级

て、換き間とい

との は一時で

か物で震

い相じん

をフ自動きか、

かが詰"様だな

かた製造

跳き表記對なだ 間まを

塵のにになれるに被

はれば

時でにつき、後だなど

0

00 0

算。表 了。 の 上 。

福むに

つ網でし

8

0

燃が生き間\*美

つに行か十酒

をかい

ある 前は好す

頭音の遡また

を主性る度の女系

持然のな

上も思さあから

て、地方(温泉

弱なた といっ 衆な寝ち

た潜し床

はなったかける

生常能沒自它何い

体をんか

けひりで

全あ 385 0 88 7 9 3 6 下で編書び、人を事を事まち 0 000 音を夜ょて 自じれ を 更上置か分が前さな 響いけ きかはいす かせているとことで 見でし 理,势。 る。水・勝き理。ほどで 手で回ぐく 音があった 8. 1 12 云はる 1/2 せ 々(大龍 3 と 路 P 6 遠話を

- v P 人なかないやう い特色 女人 前を似れなっ のな福を 摩記に が 閉の聲言種。 12 0 V と真。似に居るのと から節を 5 道恁麼処 を置まして、 であ 居る者なが 大道の ·後 के आह 氣。つ 一句の 流さり はだい 15 透った い顔言 節治す すけし しを 、見。

婚さい年のつ 姿が顔か許な空でた 横り、味があったろうが、 乞言の 仲芸 食がでも 習とい つ 時で服がた w 思ないを 出华九意思。 の闇さい 夢での出作 12 酔ンの 太 俊 色

て眠んだら あげ途。回点水分か 真さると 黒っの、冷き、て 端に想いる い で頭をた 塞。 風きず し。 波 雲 あか。 い む 風きァ て ら しためす は胸部思さんな晩光 .0 思はすない せいが 奴含 " h" ] なのから からつ 6 5 いるとのなっていると 破った福さか あるちに、当 ないと契った二 0 引つけな 歸之 煽血的o そのたこ人 引のれ 紫紫 先うらに 2 の飲る白に 色に 被なが、あねん 刻。れ傾言 色 つた 殿門 T HE う、葉のであ 女気がいた 出"雪彩》 0 h 12 てい光 はない。金湯 来。でも何だる降れた 仲等 12 28 -派出血のの言 8 2 暖力の大温 0 出"が二 5 鳴かた。快 かがき 0 烈言ツ I 丈"るか 12 い時が か けのか NE S 夜ゃ々り星に 勢でくッ 具に組るる 亚加 崎で柔いが 強さな 5 難論つ にか綴ない明 0 をは、はつ 種や 12: 吐里具" 0 现为 党を身かい 男言

然もの 分が時で ため 2.8 中多女。敗音來祭 に女なな接ばのい 一步 8 3 b 0 長春ので散え胸を物に始と、 に 骨の風でに にかてらつ 吃って 目が実で高れ食いて ヤイをな 嫁る者 シャ様り 9 0 6 ~ 人をあ 何う 目のしし や分え 16 唇o彼。

. 6 を言にか 訪らいやは 食"自 た 12 金营 う分んで 3 変だ 女九二 mice 120 0 何に知った 事: E 9 5 は 状でで 殿63 12 处 83 0) 遊 0 彼女が た D. 6 應る

0

3 違言助特何。た ひねしら はてて逢か 違為 S は 時 ~ 臭れ 蛇き

7.1. 2

美いへし 奈 5 何人 ~ 77> 12 He o なつ でが と て 歴・子・飛・典・機・供 7 居る んで水でなった。 3 だろう ではだら なかっ 6 助等 w 懷言 ・稲貨ね カン 喜まだ 12 2 は行か 经加加 2 21.

(三)

v 30

太息をついのに、 子の供え か 26 知し n に腹違うて、 寒さに凍るない新し

. 歩く五十面の 文まけれて書いた 6 門萬戸に 中: 姿が平一様:見かは のかで常光制 名名 空は に修り 720

ム如く歩くのであった。 が の乞食の 真實脚立たねばや、 が のであった。 動で 文を変しく、質いので、 変しく、質いので、 な通り、 くのであつた。 頓でちょこなんと虚つて賑かいと、髪は迷々と削して、襤褸の衣纒ひたる昨夜質によろこび溢れたる新年の大道を、これは質して、できるなどである。 正月だな」とつく ( 販心した 綺羅を飾った人を眺めて居たが V はなく 々と柔 した様に 獨言 03 可也

28

、、、 上基軍戰 市を尉の 込健蘭器 發起人 氏はなり 都 台濱岡廣 本田山告 の各中郷 1K 2 條前當 新精秀 三幾平 御に搬

知燈放日

明治四 發編 行輯 年 年 **鹿兒島縣給瓦高加治木村反土九十四番戶** Hi. (非賣品

克

鹿兒島新聞社加治木支馬內 电见岛数增祉加治木支馬內 加 竹 木 [6] 鄉 台 事 粉

印 剧人 與兒島縣院以島 市 110 七十一雷地 之 丞

島 新 岡 沚

處見 島市經師町八十九番日 北 川

刷所 庭

印

兒

議

賀

離

新

年

譴

仆

5

51

始

0

稻

を飲

清國北京大學堂

尚客賀

**年中新** 

不一年

本诚

弘は

和方

髪な

倍ら

穀佐り物の御

雜卻愛

貨引班 立を を解

美泰1.

顯素

候謝飯

誰

邻

拐姓美

銀行供業能の日地内

明治 29 H 內務省許